
無名王 りりかるナユタ ～チートなのはヒロインです～

無名一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無名王 りりかるナユタ ーチートなのはヒロインですー

【Nコード】

N5246N

【作者名】

無名ー

【あらすじ】

事故で死んでしまった主人公は次に気が付いた時には魔法少女リカルなのはの世界にいて、守護騎士兼融合騎だった。

更に目の前には眠り続ける少女がいて、主人公はこれからの行動を選択することになり、何のかんで物語は始まった。

尚この作品は編集した再投稿作品になりますが、展開が同じになるかは判りません。

プロローグ

「我、使命を受けし者なり」

「わ、我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「えっと、契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は…」

「そして、不屈の心は…」

「「この胸に！」」

「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！」」

『スタンバイ、レディ、セットアップ』

現在俺は、なのはが桃色の光に包まれていくのを眺めている。

「そうか、ついに来てしまったか、この時が……」

などとのたまっている。

自分でもどうかと思うような台詞ではあるが、今はそんなことが言ってみたい気分なのだ。

ここに到るまでが永かった。

そんなことを思いながら俺は今までの回想に入る。

俺はを割と普通の人間だったと思う。

大学で卒研しながらアニメ見たり、ゲームしたり、漫画や小説を読んだり、偶にバイトしたりそんな感じで生きてきた。

最後の方はあまり覚えていないのだが、卒研の進みがよろしくなく、気分転換にバイクをかなり跳ばしていた。

トリップ物にはお約束、対向車線からトラックが突っ込んできた。

俺は根性と気合で避けたがその後よく覚えていない。

おそらくバランスを崩し転倒、打ち所が悪かったんだと推測する。
享年22歳であった。

やはり卒研と就職活動がうまく行かず世界よ滅べと叫んだのが原因

か？

俺は輪廻転生信じる宗教家なかったが、次に生を受けたとき（気が付いたとき）俺は守護騎士であった。

俺自身よくわからなかったが、そうだったんだからし方がないと諦めた。

さすがに楽天的過ぎると思うがそんな性格だから仕方ない。

とりあえず一息ついて現状把握に努めた。

どうやらここはどこかの研究所？の様だ。

そして目の前にカプセルに入った少女。

年齢は十代半ばぐらい、蒼く長い髪（ストレートで膝ぐらいまである）と白い肌が特徴的な綺麗な子だ。

かわいいでなく綺麗、これ重要！

次に自分、外見年齢二十代前後ぐらいの男、身長170～180ぐらい、黒い髪に黒の瞳、服装が黒のインナー、知識にいろいろ身に覚えのない危険な情報がたくさん・・・

取りあえずここの端末を使ってもう少し詳しく調べてみよう。

（うわ……ぜんぜん知らない文字や機械が読めたり使えたりするよ）

俺はこのときご都合主義にたいそう感謝した。

とりあえずわかったことを整理しよう。

問1…ここはどこか？

辺境の次元世界に存在する地下研究所。

問2…何の研究をしていたか？

人造生命体。

問3…今の時代は？

不明、最後の研究記録から数百年が経過。

問4…ここに人がいない理由は？

戦争の激化により研究所を一時凍結。

問5…少女について。

アルハザードの遺産より生まれし不老不死の王。

問6…アルハザードの遺産とは？

名称デミウルゴス、漆黒の情報集積高密度魔力結晶偏倚多面体。

問7…俺について。

王の守護騎士。デミウルゴスの戦闘制御用ユニゾンデバイス。

これで大体状況整理が出来たと思う。
かなりつつこみどころが満載だが、なかなかいい感じの設定だ。

俺はリリカルなのはの世界に来てしまったようだ。

とりあえず守護騎士でよかった。

下手に原作キャラに憑依とかしてたら困ったかもしれない。

まあ、それはそれで面白そうではある。

次があるならチャレンジしてみたいと思う。

随分横にそれたが、これからのことを考えなければならない。

このロストログア（デミウルゴス）から俺と少女は生まれた（作られた）らしい。

このロストログアが核（コア？）になっていて、こいつが破壊されない限り少女は死なないようだ。

俺も同じで例え死んでも（破壊されても？）再構成できるらしい。

しかし、研究を中断したからにはそれなりの理由がある。

この少女には意思がない。

生きてはいるが動かない。

（まあ、心臓動いているのも息してるのも擬似的なものではあると思うが、

それについては俺にも同じことが言えるのかもしれないけど）

どうやら最初からイベントが発生しているようだな。

つまり俺は姫（王ならば女王？）を目覚めさせ、最強の騎士を目指せという訳ですね。

俺は姫を守る騎士！ 男なら一度は憧れるシュチュエーションのはずだ！

「どうやら俺のやるべきことは決まったようだな！」

そう、俺がやらなくてはならないことそれは！

「キミに必ず“こころ”を持たせて見せる！」

俺は声を上げ指を指し宣言した。

俺のテンションはかなり上がっている。

こういう時は乗りと勢いだ。

ロールプレイは大切だ。

精神病の相手には根気よく語りかけることだと、どこかで聞いた気がする。

「よし、まずはキミと俺の名前を考えよう。いつまでも無名では困るだろう。

俺も過去への決別を込めて新しい名前にしよう。

名前とは自己の認識に不可欠なものらしいからな。

さて、どんな名前にしたものか……」

一時間後……

悩みに悩んでようやく決めた。

名前は一生物だからなよく考えないとな。

優柔不断なわけでは無い。ゲームキャラでもデフォルトがないと悩むんだよ。

自分の名前でも悪くはないが、なんか違う気がするからな。

傍から見た独り言を呟きまくっている危ない人かもしれないが、断

じて違う。

さっきも言ったが語りかけることが、重要なのだ。

「ようやく決まった。キミの名前は、ナユタだ。

那由他が名前の由来だ。

永遠なんてありえないけど、近付けるくらいはできるだろう」

どっちにするか悩んだぜ。

永遠とか悠久は違うネタに奔りそうだったから、まあそれはそれでいいとも思う好きだからな。

「そして俺の名前は、アイギス。

この名にナユタ、君を守り通すことを誓おう。

そう：俺はこの名に誓う。

なぜならそれが今の俺の存在理由なのだからな、目的があれば人は前に進むことができるからな、これから様々なことがあるだろう。

だがどんなことが起ころうとも、共にいることを約束しよう。
末永くよろしく頼む」

なんか愛の告白のようになってしまった、かなり勢いで言った様な気がするがまあ良いだろうこれから長い付き合いになるのだから。

それでは、今の内にリリカルなのは思い出して、話の内容を纏めて置きますかね。

原作に関わるつもりはあんまり無いけど、後で役に立つかもしれないし、俺忘れっぽいからな。

人生備えあれば憂いなし。

先人はいい言葉残したね♪ 全く持ってその通りだ！

第01話 「初手は奇襲」(前書き)

どうも、アイギスです。これからどうぞよろしくお願いします。

最初ぐらい、しっかり挨拶しないとな！

前回俺のこの世界での始まりとナユタとの出会いを話した訳だが、もう少し回想を続けたいと思う。

しかし、すべてを語るのはすぐ長くなる上に、俺自身めんどくさいのでダイジェストに行きたいと思う。

それでは『無名王 りりかる ナユタ』はじまります。

第01話 「初手は奇襲」

俺はあれから研究所の研究データからデミウルゴスについて調べた。どうやらオーバーテクノロジーのようで、ブラックボックスなども存在しているようだが、俺にはさっぱりだ。

とりあえずわかったことは、こいつに様々な情報が蓄積されているのと魔力の物質化・分解できるらしいこと（現状で判っているだけで）。

つまりこいつの力を使えば、欠損した肉体を復元するような治癒魔法や無限の^{ウシエントリヒ・ヤークト}猟犬、アンチマジック、AMF（Anti Magic link-Field）みたいな魔法を使えるようだ。

これだけでもめちゃくちゃチートな能力だ。

残念ながら今はほとんど使うことができない、この少女が目覚まさなければ扱うことができないようだが、ところがどっこい俺がユニゾンすれば限定的にだが扱える様だ。

次に俺が調べたことが魔法とデバイス関連について調べた。どうやらここにある魔法術式は古代ベルカ式のようなうだ。

デバイスは研究所にあったものを使い製作させてもらった。

俺のデバイスがアームドデバイス『蒼牙』

ガントレット型の青いデバイス

六発式リボルバーカートリッジ搭載（両手で計十二発）

碧のコア、肘の近くから刃の生えたデバイス（某髭男参考）

待機状態…タグ型

騎士甲冑…胸に黒のプレートメイル、青の半袖メタルジャケット、

黒いフールドに青い布、黒いズボンにレッグアーマー。

ナユタのデバイスもアームドデバイス『斬天』

刀型の赤いデバイス

青いコア、鐔と柄の部分が赤い、刀身に波紋がある大太刀。

カートリッジはレヴァンティンを参考に作り刀身が太くなった。（総弾数六発）

待機状態…指輪型

騎士甲冑…漆黒の巫女服に赤と白の骨鎧（某赤鬼参考）

こんな感じでネタに走った。いいジャン好きなんだから。

蒼牙に付いてはトンファーにするかものすごく悩んだが、結局ガンレットにした。

俺は殴り合う方が好きだ。

カスタマイズや別形態の紹介はまた後でしよう。

楽しみは跡に取って置く方が良いからな、今言うのはアレだし。

次に俺がしたのがこの施設のデータの破壊。

ここのデータやばい物が多かったからな、例で挙げるなら古代ベルカの質量兵器とか、そんな訳でここのデータにはオールクラッシュしてもらった。

バックアップはデミウルゴスの中にあるから必要無し。

使えそうなものはいただいて、危なそうなものは物理的にも破壊させていただいた。

ここは色々使える機材があるから壊したものは最小限。

これからも拠点として利用させてもらう積もりだ。

そうして俺とナユタは研究所を後にして旅に出た。

因みにナユタは如何しているかというところ、俺がユニゾンして動かし

ナユタの体は、身長160前後、スタイルはなかなか引き締まっている。胸は大きめ（日本人主観）。髪の色がユニゾンで薄くなつて空色、瞳が血のように紅い。

融合事故の気もするが解除もできるし問題ないだろう。元々こういう用途で製作されたようだし……

とりあえずの目的は世界を見て回ることと魔法の修行だ。

そして俺は様々な場所を旅した。

旅をしていてこの体が便利だということ実感した。飯と睡眠が必要ないというのが大きい。まあ睡眠は精神安定や休息のためにしていたが、食事は完全に趣向品だった。

旅をして解ったことは、今がおそらく旧暦後期（聖王統一戦争時代）ということだ。（原作より軽く300年以上前）
不味い時代に目覚めてしまったが、旧暦初期よりはましだと思って
おこつか……

ベルカ戦乱記は人体強化した王が名乗りを上げて質量兵器を使い戦う弱肉強食の時代。

こんな時代じゃ楽に死ねるだろう。

まあ、旧暦中期からは魔導が主流に成りつつあるけれど、質量兵器も使われている。

そんな訳？で俺は目的に情報と技術習得をプラスした。

なんせ今の技術や情報は失われていくからな。

そんな軽い感じで楽しいスリルある旅をした。

それから十数年くらい経ってから俺は王として名乗りを上げる。
ナユタ

ナユタは王になるべく生まれたのだから、王で無ければ成らんと想い一旗挙げる。

逸れ者やならず者が集まる辺境地を實力で纏め上げ統べさせて貰う。ナユタは玉座に座っているだけで、後は全部俺が頑張った。

この日の為に学んだ帝王学を遺憾なく使い、一国を作り上げた。それからは国の舵取りをしつつ、ナユタに心を持たせる為の研究に打ち込んだ。

ぶっちゃけた話、個人研究に限界を感じ始めていたというのも国を作った理由にある。

主に資金とか資材とか機材とか、色々足りなくなってきたから。

ナユタに付いては俺個人のことなので秘密裏に研究した。

表向きは技術向上のための魔導研究をしていた。

これも俺の目的の一つではあったから、なかなか楽しめた。

そんな感じで時は流れたが、我が国は次第に戦乱に巻き込まれていく。

こんな辺境にある上に弱小な国まで狙われるとは、戦禍の広がり恐るべし。

我が国は血気盛んなものが多かったから、始めの内は善戦したが戦力は圧倒的。

ムゲフロを参考にパーソナルトルーパーP Tを製作したが焼け石に水だった。

製作時間とコストの関係上で、量産型ゲシュペンスト Mk-IIを製作し、量産したのが間違っていたかもしれない。験担ぎの為にも見た目だけでも、もっと強そうなのにしておけばと少し後悔した。

結局数十機しか生産できなかったが……

コスト度外視のカスタムメイドで俺が手掛けて再現したファントム、ナハト、アーベントはそれなりの戦果を挙げてくれた。

もっとも、我が国は戦火を逃れるために無人世界への移住を早期に決めてしまったので、敗戦は決定していたので元々時間稼ぎの為に製作したのだ。

我が国は創立してから戦禍を逃れてきた難民に溢れていたから、仮に戦渦に巻き込まれなくても移住に付いては時間の問題だったかもしれない。

我が国はすべての難民を入れても数万しか人口がいなかったから、移住計画は殆んど成功した。

^{ナユタ}俺とゲシュペンスト部隊、志願兵は時を稼ぐ為に最後まで戦い抜いた。

時間を稼いだ後、志願兵生き残り全員後退は転送装置で逃亡させて、俺は施設を爆破後逃走させてもらった。

尚この時ファントムだけは回収に成功したが、ナハトとアーベントは消息不明。

俺は因果なものを感じながら、今後の展開に少々不安を感じた。

移住した人たちは逞しく生きているようだ。

俺が開発・設計・生産しておいた万能工作ロボ28号DX・匠^{たくみ}が役に立ってくれたようだ。

全長約3メートル、ドラム缶型ロボ。元々戦闘用に設計したのだが、敗北フラグが立ちそうだったので、工作ロボに設計し直したものだ。

因みに歴史にナユタの名前は残っていなかった。

後になって振り返って気付いたが、俺自身がナユタの名を名乗ったことは一度もなかった。

ナユタにユニゾンしたのも、国造りの最初と最終決戦時の数回だけだった。

更にユニゾンしている時に喋った記憶は殆んどないし、俺が融合機だということを知っていたのもごく少数だけだった。

おかげでフロンティア（国名。後に転移先の世界名）の王は実在したかどうかも怪しまれている。

フロンティアの歴史には英雄として語られている。

その後の俺は少々引きこもりながら研究を続けた。

気分転換に外出もちゃんとしていたが、これ以降は活動を少々自重

していた。
もともと、行動自体は自重しなかった。

ヴィヴィオのオリジナル、オリヴィエやイングヴァルト、イクスヴェリアを見にベルカに行ってみたり。

今ならまだ永全不動八門すべてが有るのではないかと地球に行ったり。

スクライアよろしく遺跡を巡り発掘を試みたり。

現役の最高評議会メンバーを見に行ったり。

管理局に入局してみたり。

無限書庫で司書をやってみたり。

聖王教会で騎士見習いをしてみたり。

そんな感じでナユタとアイギスの姿を使い分けたり（時には変装も）いろいろやった。正体がバレないか、話をブレイカーしていかないか結構どきどきだった。一回ばれかけたことがあったが、その時は死んだように見せかけごまかした。

さすがに十数年経っても全く年をとってなかったら疑いもたれるわ。なんて思いながら俺は回想は終わりを告げる。

ほとんど何も話してないように感じたかもしれないが、談じて違う！物語を語るには布石が必要なのだよ。

こう話の流れで展開が読めていたとしてもあえて隠さねばならないのだ。某少年探偵も見つけたものや気が付いたことを隠しているだろう！それと同じだ。

決して俺がめんどくさいからではない。

後で気が向いたら話してやるから気長に待て。

「リリカル マジカル！ジュエルシールド！シリアル？？？、封印！」

俺が思い出に浸っているうちに戦闘が終了したようだ。モンスターが光に飲み込まれていく。

俺はすぐにジュエルシールドに向かい跳躍！

轟音を響かせ、派手に粉塵を巻き上げ着地！

「ふえー！？」

「な、なんだっ！」

いきなりの出来事に混乱しているなのはとユーノを無視してジュエルシールドを回収、全力でその場を離脱した。

まさに一撃離脱！

そうだ！ 俺はこの時！ この瞬間を！ なのはを観察しながら待

っていたのだ！

ジュエルシードを手に入れるそのために、なぜ俺がジュエルシードを集めているかというとなユタの意識を覚醒させるために！

アレから長い時間が経ったが、いまだに意識がない。

いや少し違うか意識はあるが意思を感じない。

喋りはしないが、一応受け答えはしてくれる。

しかし、そこには自己の意思が殆んど見えない。

無言・無表情・無感情と3拍子そろっている。

表現できないだけかもしれないが、今のままでは動く人形のように見える。

これはこれで最高にクールに見えるが、ずっとこのままでは駄目だろう。

俺はどうすればこの子に感情を持たせることができるかを考えていた。

そして考えついた方法がジュエルシード。

ジュエルシードの人の意思に反応する特性と内包する魔力を使えばナユタを覚醒させることが出来るのではないかと俺は考えた。

そして、俺の計算によれば、ジュエルシード10個で可能と出た！

しかし、はつきり言ってかなり荒いショック療法ではある。

しかも！ あくまで可能性で成功確率50%ぐらいだ！

仮にこれが失敗したとしても、また新しい方法を探せばいいことだな。

今までもずっとそうしてきたのだから、それでもこれまでで一番成功確立が高いのだから期待もデカイ。

今までの試してきたことは不確定要素が多すぎてまともな結果が出なかったのが原因かも知れないが、俺にとって確率など単なる目安だ。

偉い人は、足りない分は勇気で補えと言っていた。

っと解説的ナレーションしているうちに俺の仮住まいに到着したようだ。

俺は扉開けて中に入る。

「ただいま」

「おかえり」

俺の声に返事が返ってくる。俺がリビングに行くとき椅子に持った少女が出迎えてくれた。

ここまで来れば解るだろうが、今現在八神はやてさんの家に居候させていただいている。

いろいろ理由があるが後の闇の書事件のことを考えると、ここにいろん方が動きやすいだろうと思ったから、どうせ原作に関わるならこっちも何とかしてやろうと思った。

俺アインスは結構好きなキャラだからな。

グレアムの行動が気に食わないと言うのもある。

こう、他人の計画が予定通りに進むのは面白くないというのが大きい。

俺は自分の計画が最後まで旨く行った事は殆んどないから……

家の周りには俺が改良を加えた古代ベルカ式の隠蔽結界が張ってあるから家の中の様子を窺うことはできないだろう。

（ふっふっふ、があっははははあ）

と内心笑っていたのは置いて置く。

はやての出会い、俺からの接触。正面からストレートに勝負に出

た！

はやての場合は正面か向き合った方が良さだろうと思ったからだ。
この世界の少女はそんな奴ばかりだと考えたのは俺の秘密だ。

だから俺はナユタを助けるのに力を貸してほしいと頼んだ。（ちな
みにこの時、俺はナユタをお姫様抱っこしていた《爆》）
詳しい訳を話したらあっさりOKしてくれた。

そんな訳ではやてには魔法のことや闇の書の事、俺とナユタの関係を
簡単に教えてある。（俺とナユタについてはユニゾンでできること、
自分が守護騎士であること、ナユタが生まれつき意思が無いことぐ
らいしか話してないが）

「お風呂沸かしてあるから、入ってきたらええで」

「ああ：ではそうさせてもらおうか、はやてはそろそろ寝た方が良
いぞ」

「ほんなら、兄ちゃんが風呂から出てきたらベットまで運んだって
な」

「へーい、わかったよ」

ちなみにはやては俺を兄ちゃんと呼んでいる。
なんでも

「見た目きつそうやけど、雰囲気が軽そうな気がするわ」

とのこと、初見でそのことに気付くとは、なかなか侮れない。
そんな風に俺の一日が終わった。

第01話 「初手は奇襲」 (後書き)

話はこんな感じで進めて生きたいと思います。

アイギスの過去はリクエストがあれば書きたいと思います。
では、次回をお楽しみに。

第02話 「なのはのその後と俺の告白」 (前書き)

どうも、こんにちは、こんばんは、アイギスです。

前回、最初のジュエルシードを俺が強奪！

そして俺の目的を語った訳だが俺の過去回想を端折りまくったから、これからも過去回想がパカスカ入るかもしれないが気にしないでくれ。

かなりご都合主義な展開もあるが華麗にスルーしてくれ。
なぜなら俺は楽天的^{ハッピー} & ご都合主義^{イージー}だからだ。

ちなみにここでの話しはモノログで舞台外だ。

本編との関わりは一切無い！ だからかなり好きに発言させてもらう！

気が向いたらゲストを連れて来るから気長に待て！

リクエストがいるなら受けつけても構わないと思っている。

因み今回の話は、俺の一日は終わったが、なのはさん(原作主人公)をあのまま放置するのはあまりに可哀想(後が怖い気がする)なのでそっちサイドから話を始めたいと思います。

かわいい女の子を無視する訳にはいかないからな。

(まあ どうなるかは、解りきってはいるんだがな)

では、そろそろ本編を始めるとしよう 『無名王 りりかる ナユタ』
始まります。

第02話 「なのはのその後と俺の告白」

side 高町なのは

「はあ、はあー」

わたしは今、ベンチに座って休息中、なんだかよくわからなかったけど、あの煙が晴れた後には何も残っていないくて、それを見たフェレットさんはすぐあわてたようすだったけど気絶してしまって、そのままあの場所にいるのは、たいへんアレなので逃げてきてしまいました。

「うっ、ん」

「あ、気が付いた？」

フェレットさんが目を覚ましたみたいなの。

「へ、ここは？」

「ここはさっきのところから近くの公園だよ」

「こうえん……そ、そうだ！ジュエルシード！ジュエルシードはどうなりました！あれからいったいどうなったんですか！」

「ちょ、ちょっとまって、落ち付いて」

なんだかすごい勢いで焦っているみたい。

「えっと、ジュエルシードってあの青い石のことだよね？」

「ええ、そのとおりです」

「あの石は煙が晴れたあとには、もうなかったの」

「そ、そんな」

なんだかすごく落ち込んだ様子です。ど、どうしよう！？

「と、とりえず自己紹介しようよ。わたし高町なのは、小学校3年生。

家族とかなかよしの友達は、なのはって呼ぶよ」

「僕はユーノ、ユーノ・スクライア、スクライアは部族名でユーノが名前です」

「ユーノくんか、かわいい名前だね」

うん、やっぱり自己紹介は大切だよね♪

「すみません。あなたを巻き込んでしまいました」

「なのはだよ。えっと、わたしことならたぶん平気。

それより、ユーノくん怪我してるんだし、ここじゃ落ち着かないよね、わたしの家に行きましょう。あとのことはそれから」

そういつて声を掛けたんだけど、

「いえ、これ以上迷惑を掛ける訳には行きません。

それに、僕はこれから奪われたジュエルシードを取り返さなければなりませんから」

「そんなの駄目だよ！ユーノくん怪我してるんだよ！」

「ジュエルシードは、とても危険なものなんだ。絶対に取り返さないと」

「それならわたしもお手伝いするよ！困ってる人？を、放って置くことなんてできないよ」

「危ないよ！相手がどんな奴かも分からないのに、危険すぎるよ」

「それでもユーノくん独りのほうが危ないよ！！」

ユーノくんがわたしを心配してくれてるのは分かるけど、ここで引き下がったらすっごく後悔しそうなもの。

わたしは顔を近付けもう一度お話する。

「うっ……わ、わかったよ。ただし僕の言うことには従ってね。危なくなったらすぐに逃げるんだよ」

「うん♪ わかったよ」

よかった。ユーノくんも分かってくれたみたいで。ちょっと顔が引き攣ってたようにも見えたけど、気のせいだね。

「それじゃあ、わたしの家に行こう。お話の続きは帰ってからにしよう」

それからユーノくんを連れて家に帰ったんだけど、お兄ちゃんに怒られたり、ユーノくんがお父さんとお母さんに捕まったりして、結局お話できないまま寝ることになってしまったの。

現在俺は、ユニゾンして神社裏の森に朝錬に来ている。
もちろん神社にあったジュエルシードは回収させて貰った。
なぜこんなところで朝錬してるかというと、

「はあっ!!」

「やっ!!」

高町恭也と木刀を手に（小太刀型を二本）打ち合っている。
飛針、鋼糸なし、剣技のみで手合わせしていた。
近くでは御神美由希が見学している。

そう・・・御神美由希、何故御神の性を名乗っているかというところ、
結婚式のテロフラグをブレイカーしたからだ!!

俺は一応約200年以上前に御神門下の末席に身を置き、御神那由他（この時はユニゾンしていた）を名乗っていたからな。

この時代はまだ八門の内他の一派、小太刀の他に太刀、槍、薙刀、弓、暗器などが存在していた。

術も嘗て存在したらしいが、残念ながらすでに失われていた。

弓に関しても銃が出て来て失われつつあった。

携帯が容易な小太刀と暗器の一部が現代まで残ったと推測する。

まあ、八門一派・御神真刀流に身を置いていたから他の一派は詳しく知らないが……。

俺はこの内、小太刀、太刀の2つを極めんと修行した。

基本はどれも殆んど同じ斬、徹、貫、心そして奥義の歩法『神速』

残念ながら俺はどれだけ修練を重ねても『神速』を会得できなかった。

人間は五感で周囲の状況を判断する。

だが、視覚が凄まじい集中力を発揮している場合には、脳が他の感覚を遮断し、視覚にのみ全ての能力を注ぎ込む状態が起こる。

この時、通常では考えられないような視覚の能力が発揮され周囲の動きが止まっているように見え、色彩がモノクロになる。

また、自分の動きもスローモーションのように感じられるらしいがっ！

俺にはそんなこと全く感じられない！！

やはり俺たちが人に近い存在でも人でないのが原因かもしれない。

そんなことしなくても神速を使っている奴と遭り合うことが出来たのも大きな原因かもしれないが？

魔道師のマルチタスクと高速思考は伊達ではないぞ！

貫を極めればその応用で、敵の動きを先読みできるのだ！

もつとも、相手にも同じことが言えたが、それ故に相手の体全体、間接と筋肉の動きを見極め目なくてはならない。

まあ、魔力を使えばそれに近い事、知覚を加速させることが出来るようになった。

例を挙げるなら最初にバイクに乗った時は時速30キロで速く感じても、慣れると時速100キロでも余り変わらなくなってくる。

これを突き詰め意識して遣うことを出来るようにした。

他には全身に魔力を通して強化できるようになった。

魔方阵を発生させることなく、息を吸うように自然に使えるよう修行した。

これぞ東洋に神秘たる気の原理だな。

そんな感じで十数年ほどの修行を経て最強と謂われる様になったのだが、快く思っていない奴が多かったようで、襲撃者が後を絶えなかった。

どう見ても異国人なのが不味かったようだ。

俺としては斬、徹、貫、心や大半の奥義を修めることが出来たので世話になった同輩、師範、当主に挨拶をして去ることにした。

今代当主は実力主義で豪快、話の判る方だった。

「そうか：貴様の実力は惜しいが、貴様自身が決めたのなら仕方ない。

止めはしない：がっ！　いつでも戻って来い！　貴様は御神の戦士だからな」

と言ってくれた。

この言葉には甚く胸打たれ、感激したものだ。

ここの実力者は、ほとんどが実年齢より若く見えたのは余談。

そんな感じで随分世話になったから、テロフラグをブレイカーしようとしたが、龍もなかなかやってくた。

俺は結婚式前日に御神静馬さんに接触、結婚式襲撃について警告して置き、御神一族の助太刀に式場に行った。

因みにこの時、俺とナユタ（感情欠落症と説明）は別々に仕掛けた。魔法を使わず自己の戦闘技術のみで相手した。もっとも騎士甲冑は装備していたし魔力は使っていたが、因みに俺は無手でナユタは小太刀二刀。

爆弾を仕掛ける前に仕留めるつもりだったが、敵は神風よろしく自爆して逝きやがった！　さらに、敵はこちらの非戦闘員を狙って来たから、こっちも半数近く死ぬ破目になってしまった。正面で戦っ

ていた静馬さんが死ななかったのは不幸中の幸い。

さすが御神の歴史で、最も優れた剣士と謳われている男！

俺でも魔法なしで勝てるか微妙なところ（十中八九負けるだろう俺が！）

そして今現在、御神、不破、両家は『龍』を潰すため現在も追いかけている。

俺自身何度か戦闘に助太刀している。

静馬さん、美沙斗さん両名とも前戦で戦い世界中飛び回っているの
で、美由希ちゃんは、士郎さんに預けられている。（二人とも時間
を作り、休暇の度に美由希ちゃんに合いに来ている。俺とナユタも
高町家にそこそ付き合いがある）

この時に世界の修正力があるのかと少し思った。

「ふうー」

俺達は鍛錬を終えて今一息ついていた。

ユニゾンは手合わせが終わったときに解除した。

ちなみに高町家、静馬さん、美沙斗さんたちは魔法のことを知っている。

何故知っているかというテロ事件の際に応急処置や士郎が死に掛
けたときに使ってしまったからです。

他にはバレてないですよ。

つまり高町家で魔法を知らなかったのは、なのはだけだったりした。

「そういえば恭也、昨日の夜、なのはを見かけたぞ」

「ん…なのはを、か？」

「ああ…どうやらこちら側に関わったようだ」

「……そうか」

「そうか…って恭ちゃん、言うことそれだけしかないの！！」

俺と恭也の会話に美由希が割って入ってきた。

「なのはが自分の意思で決めたのならば、止めるつもりはない」

「けどそれって、危ないんじゃないの？」

美由希は俺に心配そうに聞いてきた。

「危ないだろうな、特に最近のここ周辺は」

「ちょっと、恭ちゃん！」

「さっきも言ったが止めるつもりはない。それになのはが決めたのなら俺達が何を言っても無駄だろう。もしもの時は俺たちが守ればいい」

「それは…そうかもしれないけどさ…」

そう言って美由希は黙ってしまった。

「…だが、魔法に関しては俺達では手が届かない部分もあるだろう。その時はなのはを助けてやってくれないか？」

恭也は俺にそう言ってきた。

「今回に関しては俺自身目的がある。成り行きによっては、敵対することもあるかもしれないが、最低限の手助けはしよう」

「ああ、それでかまわない。よろしく頼む」

「ああああ、まったく、恭ちゃんは素直じゃないな」

「五月蠅いぞ、美由希」

バシッと美由希が頭を叩かれていた。

「つつゝいったあゝ、あつそういえばアイギスさんの目的って……」

「ああ…うまくいけば、この子は笑えるようになるはずだ」

「そうか…手伝えることがあれば言ってくれ」

「うん♪ 私も出来ることならなんでも言ってくれていいよ。
ナユタさんの笑顔、私も見てみたいからね」

「ああ…その時はよろしく頼む」

二人は俺にそういつてくれた。

俺は二人の言葉にうれしい気持ちになった。

高町家の人たちにはナユタのことを気に懸けてもらっている。
この町に滞在することを伝えに行ったときも、家に来ないか声をかけてもらった。

残念ながらもはやての家に居候することが決まっていたので断らせてもらったが、近いうちにははやてを連れて行くことになっている。

「そういえば、なのはが連れていたフェレット、あいつ雄じゃなく男だぞ。 気を付けた方がいいかもな」

「…ほお…そうか」

さりげなくユーノのことを恭也に告げ口してみる。

恭也の方から濃厚な殺気が漂ってきている。この様子では士郎さんにもすぐに伝わるだろう。

因みに美由希の顔は引き攣っている。

面白そうだ…観察できないのが残念だ。

この後俺達は解散した。

俺はナユタだけはやての家に帰して、次の行動を開始した。

第03話 「休息の一時」(前書き)

皆さんごきげんよう、アイギスだ。

今回は後半から俺と御神の一族との話を語らせてもらった。
まず、この物語にはとらハの話は、ほとんどないことを言わせてもらおう。

ここはリリカルなのはが主軸ですから。

御神の技量は、常人では勝つのが不可能レベルと言ったところ。

この一族は某戦闘民族みたいに強くなりますから……

さて、今回は前回から数日経ってからのスタートだ。

俺はその間にがんばって目的のために下準備している。

これも我が姫を目覚めさせるために！！ (言ってみたかった)

それでは『無名王 りりかる ナユタ』始まります。

第03話 「休息の一時」

俺は今現在、海の中にいる。

いきなりで意味がわからないかもしれないな、順を追って説明しよう。

まず、最初のジュエルシードの発動から約一週間ぐらいが経っていた。

あの日から今までにジュエルシードの発動回数が二回、なのはが封印するのを影ながら、見守らせてもらった。

俺は鉢合わないよう気を付けている。

ここで会ってしまうと後の楽しみが減るから。

少々危なげではあったが無事回収でき、俺が手を出す必要はなかった。

そして今現在！ 俺の計算では、なのはの持っているジュエルシードが3つ、そして俺の持っているジュエルシードの数が7つだ！

そう…俺はナユタとはやての側にいるとき以外ずっと海に潜ってジュエルシードを地道に探していたのだ！！

※朝錬は別です。わざわざ恭也、美由希と鍛錬しているのだから、週二位だが、

ナユタにもいい影響があるかもしれないし、何より人付き合いは大切です。行かないにしても前もって連絡ぐらいしますよ。

そして、今ようやくそれも終わりを告げるようだ。

海に沈む6つ目のジュエルシード、いやあ…永かった。

夜も寝ないで探した甲斐があった。

眠っているジュエルシードは広域捜査魔法に反応しなかった。

俺は諦めることなく自分を中心に十メートル四方の精密捜査魔法を展開し海の中を探し続けた。

しかし流石俺様！ 海に潜って探すとはまさに盲点だろう。よしんば思いついたとしても実行する奴はいまい！！

まだ春先の海は冷たかった。まあ…騎士甲冑のおかげで実はそれほどでもなかったのだが、体中から潮の香りがした。

俺はそれをはやてに指摘されてしまった。

それから俺は家に帰って、すぐに風呂場に行きシャワーを浴びて、念入りに体を洗うようになった。

そんな訳で、これから帰って朝風呂に入りたいと思う。

これでようやくジュエルシード八つ、後一息と行ったところだな。

まったく、もともとこんな予定はなかったからな、俺は次元航行中の輸送船からジュエルシードを強奪する予定だったのだ。

この為にジュエルシードのレプリカまで作って、輸送船に侵入したのに、後はセキュリティを誤魔化し、偽物に摩り替えるだけのところまで行ったのに……

船内に行き成り衝撃が走ったと思ったら警報が鳴り響き、船内は何が起こったのか判らずパニック状態、輸送船は航行不能、積荷は次元の海に投げ出されてしまった。

おかげで俺の計画は水の泡になった。

やはり積み込む段階で摩り替えるべきだったか……って言うか寧ろ自分でジュエルシードを発掘するべきだったかっ！

そして今日はヌタがはやてを連れて、サッカーの試合を見に行くことになっている。

つまり、ジュエルシードのイベントがある訳だが、ここは放置しようと思う。

このイベントでなのは意思を強くするのだから、生で見たいというのも本音です。

まあ：ジュエルシードは俺がいただく予定です。

因みに俺はサッカー見に行かないよ。

ナユタとはやてを見送ったら、家でことが起きるまで寝ているつもりです。

何せここ最近あまり寝ていないからな、少々ゆっくりさせて貰おう。

side 高町なのは

今日はアリサちゃん、すずかちゃんたちと一緒にお父さんが監督を務めるサッカーチームの試合を見に来ています。

他にはナユタさんがはやてちゃんという子を連れてくるそうです。

ナユタさんは、わたしが小さい時からお世話になっています。

お父さんが怪我をして倒れたとき、アイギスさんと一緒にしばらくの間、家に住んでいたのです。

アイギスさんはお母さんを手伝って、翠屋で仕事をしていました。その間、一人になってしまったわたしの相手をしてくれたのがナユタさんでした。

最初は近寄りがたい人だったんですが、とてもいい人です。あまり詳しくは知らないけど、ナユタさんが無言・無表情・無感情なのは生まれた時からそういう病気？らしいです。あと家の遠い親戚で、本名を御神那由他と言うの。今は、はやてちゃんの家に住居してるらしいです。

次に八神はやてちゃんは聞いた話では同い年らしいです。足が悪くて車椅子に乗っているそうですが、とても元気な子だそうです。

会うのがとても楽しみです。友達になれるといいな〜♪

そういえば、最近お兄ちゃんとお父さん、ユーノくんの様子が少し変です。

二人はよくユーノくん面倒を見てくれています。

お兄ちゃんが動物好きなのは知らなかったの。

いつも盆栽の手入れをしているから面倒見がいいのかもしれない。お父さんも同じように面倒を見てくれます。

それを見てお母さんはとてもニコニコ笑っています。

お姉ちゃんはちょっと顔が引き攣っているような気がするけど、気のせいかな？

ユーノくんは最近すごく疲れてるみたいです。

ときどき震えているような気がします。

やっぱりジュエルシードのことで、責任を感じているのかな？ 毎日遅くまでジュエルシードを探しているし、今日はユーノくんもゆっくり休息できるといいなと思ってます。

わたしがそんなことを考えているとナユタさんたちが着たみたい。

「ナユタさ〜ん！」

私は手を振り名前を呼んだ。

side 八神はやて

「ほな、行ってくるな」

「ああ、楽しんで来い。士郎さんによろしく言っといてくれ」

「わかったわ」

私たちは兄ちゃんに見送られて家を出た。

「それにしても兄ちゃんも一緒に来たらええのにな」

私は車椅子を押してくれてるナユタさんに声を掛けるが、答えは返ってこない。

まあ、これはもうなれたことやけどな。

ナユタさんたちが私の家に来て、二週間くらいが経った。

最初はいきなりで何やよう解らへんだけどな、悪い人やなさそうやった。

それからいろいろと教えてくれた。

闇の書や夜天の書、守護騎士や魔法のこと、沢山とことを教えてくれた。

私の足も魔法で治療してくれている。

兄ちゃんが言うにはただの気休めらしいけど、そのおかげで最近の私は調子がいいから感謝しとる。

私の足を直すには、闇の書を修理して夜天の書に直さなあかんらしい。

それにはいろいろ準備が必要で、次の私の誕生日に現れる守護騎士の力が必要になるらしい、詳しい話もその時にしてくれるそうや。

ここ一週間ほどは急がしそうで昼間はほとんどいいひんかったんやけど、一段落着いたらしく明日からはしばらく一緒にいてくれるらしい。

何でこんなに良くしてくれるか訊いたら、個人的に夜天の書に思い入れがあるらしい、他は同郷、同属のよしみだとか？

っというろ思い出してたら目的の場所に着いた見たいや。

「ナユタさ〜ん」

なんや栗色の髪を両端で縛ったかわいい子に呼ばれるな〜。

近くには気の強そうな金髪の子と見覚えのある紫の髪の子が居る。

私はナユタさんに車椅子を押されてその子達のところまで行った。

「えっと…あなたが八神はやてちゃん？」

初めにナユタさんと呼んでた子が声を掛けてきた。

「そやー、わたしが八神はやてやで、よろしゅーな」

「わたしはなのは、高町なのは。よろしくはやてちゃん」

「アリサ・バニングスよ。よろしくはやて」

「わたしは、月村すずかといいます。よろしくはやてちゃん」

みんな自己紹介が終わったところで私は気になったことを聞いてみた。

「すずかちゃんて、もしかしてよく図書館に来てなかった？」

「うん、そうだよ。こうやって話をするのは初めてだね」

「ほんまやなー」

どうやら、すずかちゃんも私に見覚えがあったようで、私とすずかちゃんは互いに笑いあった。

「すずか、あんたはやてのこと知ってたの？」

「ううん、図書館で何度か見たことがあるだけだよ」

「ふーん、ところではやての後ろにいる人は？」

そう言ってアリサちゃんはナユタさんの事を聞いてきた。

「その人は御神那由他さん。わたしの遠い親戚なんだよ」

「へー、そういえばなのはのお姉さんも同じ苗字だったわね」

「うん、そーだよ」

アリサちゃんの質問にはなのはちゃんが答えとった。
そしたらこちらに男の人が近付いてきた。

「ナユタさん来てくれたんですね、ありがとうございます。
キミが八神はやてちゃんだね、俺はこの子の父親で高町士郎、今日
はわざわざ来てくれてありがとう」

「いえいえ、こちらこそ呼んでくれてありがとうございます」

「そう言ってくれるとうれしいよ。今日は楽しんでいってくれ、出
来れば応援の方もよろしく頼むよ」

そう笑って言うのと、背を向けて離れていった。
どうやら試合もすぐに始まるようやな！。

試合の結果はこっちのチームの勝ちや。

私らもがんばって応援した甲斐が有ったてもんや。

試合の後は翠屋でお茶してたんや。

携帯のアドレス交換したり、ユーノくん弄ったりなかなか楽しかったわ。

来週はすずかちゃんの家でお茶会することになって今日は解散した。
私はナユタさんと夕食の買出しをして帰ることにした。

「今日はほんま楽しかったわ。新しい友達が三人も出来たし、何や
今から来週が待ちどろしいな。ナユタさんも付き合ってくれてありが
とうな」

やっぱり返事はなかったけれど、今は気にならなかった。

そうして買い物が終わらせて家に帰る途中凄い地震が起こった。

それはもう地面が割れて、引っくり返るようなすごい地震や、

「な、なんやあーっ！！？」

地震が終わり辺りを見回すと遠くにえろろデカイ樹が見えた。

「なんなんやあれわぁー!? っと」

吃驚仰天している私に構うことなく、いきなりナユタさんが動き出した。

それも何事も無かったかのように家の方にっ!!

「ちよーまちっ! あれほっといってええんか!？」

反応なし。

「それは兄ちゃんが何とかしてくれるってことか?」

これには僅かに頷いたように見えた。

「はぁー、わかったわ」

私はこの件に付いては諦めて、ため息をついた。
これは兄ちゃんが帰って来たらよう話を聞かんとなー。

side アイギス

来た！！ ソファで寝ていた俺にビビッと来た！

すぐに騎士甲冑を展開した俺はジュエルシードに向かって飛んだっ！
俺が着いた時には町に樹が溢れていた。

俺は出来るだけ魔力を押さえ高高度上空で待機した。

（下手に降りてなのはサーチャーに見つかる厄介だ）

俺はチャンスが来るのを待った。

そして、なのはの砲撃魔法が放たれた。

俺は砲撃が命中したタイミングで、オプティックハイドを発動して
姿を消し急降下加速っ！ 眩い光の中に突入し、緩やかに落ちてい
く少年の手からジュエルシードを回収、油断なく建物の陰に身を隠
しながら、痕跡を残すことなく高速で走り去った。

この方法なら仮に姿を見られることはない。

落ち込んでいるのはがすぐにジュエルシードが奪われたことに気
付いたとしても、追跡することは出来ないだろう。

ある程度離れた俺は騎士甲冑を解除し悠々と歩いて帰った。

これで九つ目、いよいよリーチが掛かった訳だ。

俺は意気揚々とかルルン気分だったのだが、それは玄関を開ける
までだった……

家に帰った俺は、玄関で仁王立ち？（車椅子に座っているけど）
機嫌の悪いはやてに遭遇、詰め寄られ事情を話すことになった。
簡単に言えば、ジュエルシードという名の危険物を回収しているこ
と、こいつを使えばナユタが治るかもしれないことを俺はあせあせ
しながら喋った。
それから暫くはやての機嫌が悪かった。

その日の俺は屍の如く寝た。
どこで選択肢を間違えたんだ？

side 高町なのは

家に帰った私は気付いてしまいました。

「にあっにああーっ！！ ジュエルシードが無いー！！」

「きゅ、きゅ」

ユーノくんがひっくり返ったようだがそれどころではありません。

「な、なんでっ！ どうしてなのー！ 落とした？ 落としたのー！？」

「お、落ち付いて、なのはっ！」

第03話 「休息の一時」(後書き)

作者、今後の展開についての予告

- 1、やはり原作通りフェイトが現れる。
- 2、実はアリシア救済イベントがあつて、フェイトがいないっ！
- 3、実はアリシア救済イベントがあつたが、フェイトも参戦！！

の内どれかで行きたいと思います。

それではご意見・御感想・次回もよろしくお願いします。

第04話 「運命との邂逅」 (前書き)

どうも、アイギスだ。

前回、またもなのはさんから封印したジュエルシードを強奪させてもらった。

俺自身はこれでも平和主義者だ。

争いが無いならそれに越したことが無いと思っている。

だから封印直後のジュエルシードを奪うのも戦闘回避するため。

決して、俺がめんどくさいからではない。

俺はあの後はやての機嫌を直すために相当骨を折った。

いったいどこで選択肢をまちがえたのか？

やはり前回の中盤から寝ていたのが不味かったか、ジュエルシードの被害を最小限に抑えるために少年をストーキングして広域結界を張ったほうがよかったのか？

意見があつたら是非聞きたいところだ。

さて、話は原作通りに進み、今回はついにフェイトさんが出て来る訳だ。

なのはファンか、フェイトファンかを聞かれたらどっちも好きだが敢えて言うなら、フェイトファンだと答えよう。

なのはさんはボケの突っ込みにバスターが来そうな気が予感があるからな。

まあ、それはそれで構わない。寧ろドンと来いッ！！ といった感じだ。

もつとも俺は本編でボケるつもりは無い！

そとすら
外顔は大事だからな。

人間の内心なんてわからないものだ。

他には、オリ技・魔法が出てきたりする。

名前については、スルーしてくれ。

作者にはネーミングセンスが無いんだ。

俺に無いわけではない！俺はめんどくさいから考えて無いだけ。

そんな訳で『無名王　りりかる　ナユタ』始まります。

第04話 「運命との邂逅」

俺はここ最近のはんびり過ごさせて貰っている。

やはり海でのジュエルシード回収は大きかった。

まあ：正直な話、他のジュエルシードの場所を知らないというのが大きい。

魔法を使えば探せないことも無いが、あまり派手に魔法を使うと他の方に気付かれるからな。

明日は、月村の家でお茶会を予定されている。

俺とナユタも一応参加することになっている。

はやては明日をすごく楽しみにしていて、待ちどうしいようだ。

まあ：そんな感じでそろそろフェイトも来ているだろうと思い、俺は隣町遠見市に出向いてきた訳だ。

暇つぶしという側面も大きい、鍛錬していてもいいが、如何せん相手がいない。

俺の扱う無手技は対人特化している人体破壊技。

古代ベルカの技と御神の技、そして俺の持つ知識から来るネタ技！！

これらを組合わせ300年の研鑽を積む我が武術！

敗北など、あろう筈が無い！！

……ごめんなさい、かなり大きく出てしまいました。

しかし、こと対魔導師戦ゼロレンジに置いて最強を自負している。

主眼に置いた戦術は接触状態からの関節破壊。

魔導師の戦闘はそれがミッドチルダ式・ベルカ式問わず多かれ少な

かれ間合いを取る。これは素手で戦う奴でも同じ。

だからこそゼロレンジ戦闘による関節技。

ゼロレンジでは、バリア・シールドタイプの防御魔法は使えない。
フィールドタイプの防御魔法は使えるが関節技には気休め程度。

俺の生み出した我流武術!!

御神の徹を拳で放つ『激』、相手の関節を破壊する技『砕』、接触
状態で相手の内側に衝撃を与える浸透勁『震』

この三つが基本技。空手に柔術、中国拳法を大いに参照している。

そして『激』、『砕』、『震』を三つ同時に繰り出す奥義之極み『
激震』

内部と外部を同時に破壊する必殺技だっ!!

因みにこの『激震』、難易度『閃』ひらめきクラス! 俺には出来ねえよ!

この技をまともに喰らった暁には内臓粉碎、心臓破裂の上、肋骨と
脊髄がまとめてバラバラになるらしい予想結果が出ている。

こえー! 滅茶苦茶こえーよ! 遣ってらんねえーよ! 試したこ
ともねえよ! これなら頭を潰してやる方がまだ幾分か慈悲がある
よ!

そんな訳でこちらの狙いは人体急所と関節、対魔導師戦では主に肩、
肘、手首の関節を狙う。

理由としては、デバイスは手持ちのケースが多いから。

相手が陸戦魔導師なら、膝と足首が増える。

相手を捕まえたら、放さず次々技を入れる。

デバイスを押さえることもある。

魔導師のデバイスは基本ほとんどが杖型だから掴み易い。

そんな訳で俺は対人戦闘で相手の四肢を壊すことが多い。

絞め技で落とす場合もある。(この方法が一番安全かも?)

もちろん非殺傷設定などほとんど意味が無い。

必勝手段としては、魔力付与による全身強化、『武威』（大量魔力消費の短期決戦仕様）を使い攻撃力・防御力・速力を上げて、『射抜^{ぬき}』をベースにした抜き手技『爪射抜^{そうしゃばつ}』（つめいぬきと読まないのがポイント）を相手に防御魔法で受けさせバリアブレイク。零距离戦に持ち込む。

『爪射抜』は速度重視の魔法（展開速度ではない）、自身を弾丸の如く打ち出すバリアブレイク前提の技。敵に受けられること前提のテレフォンパンチ。（並みの相手ならそれでも見切ることは出来ないが）

一撃目で敵のシールドを破壊、二撃目で仕留める技だ。

つといったのが、俺の基本戦闘方法だが流石に女子供を相手に遣るような攻撃じゃない。

『碎』で腕をへし折ったら泣き叫んだりするだろうし、『震』なんて受けたら普通に血を吐くことになるからな。（ミッドなら骨折でも一週間ぐらいで治るよ。レベルによるけど……）

手加減して関節を外す程度にしても泣くだろおそらく。

まあ…通常戦闘も出来ますよデバイスに相応しい魔法が。

そんなことを考えながら散歩していたが、何もイベントが起きなかった。

（ちっ……やはりそう簡単にはフラグは立たないか）

俺はそろそろ帰ろうかと考え始めた。

辺りは暗くなっていた。

今の時間ならもう夕飯の準備が出来てるだろうなと考え帰路に着こうとした、そのとき俺は気配を感じた。
そう……それはあえて言うなら第六感的な何か、俺は振り返りビルを見上げた。

「……見つけた」

思わず声が出た。

俺の視線の先、闇に浮かぶように金色の髪が風に流れている。

俺は挑発するように一瞬魔力を開放し、殺気を飛ばした。

フェイトは俺に気付いたようだが、俺はそれに構わず薄ら笑いを浮かべつつ雑踏に紛れその場を立ち去った。

今から考えたらやってることが完全に悪役だな。

その後帰りが遅くなった俺は、はやてに散々文句を言われた。携帯に連絡ぐらいしとけばよかった……はぁ。

side フェイト・テストロツサ

「?!……アルフ」

「ああ……感じたよ一瞬だけどかなり強い魔力だった。今のがジュエ

ルシードって奴なのかい？」

「多分違う、どうやら私たち以外にもこの町に居るみたいだね、魔導師が」

「ふうーん、それでどうするんだい？」

「どうもしない。でも、私たちの前に出てくるなら……」

「そう来なくっちゃねー、流石あたしのご主人様だ」

アルフは私にそう言ってくれてるけど…さっきの、今まで感じたことが無いくらい強いプレッシャーを感じた。

アルフは何も感じなかったようだけど、私は一瞬息が詰まった。もし戦うことになったら…

「…それでも、私は母さんのために……」

side 八神はやて

今日はすずかちゃんの家で開かれるお茶会に、御呼ばれされています。

私はこの日が来るのを、約束した日から楽しみにしてました。
そして、兄ちゃんとナユタさんと一緒にすずかちゃんの家に来たん
やけど…

「はあー…大きいなー、家の敷地に庭やのーて、森があるで…」

「月村は、ここら辺いったいの地主だからなー」

「へえー…」

なんや、ボォーとしてもーてるな、ちよっと驚いて頭がうまく廻ら
んようや。

私は顔を左右に振って正気に戻した。
あらためて見ても…

「それにしても、ほんま大きいなー、私の家も一戸建てやし広い方
やと思うけど、これはレベルが違うなー」

「ちなみにアリサの家も、ここに負けないぐらい広いらしいぞ」

「そ、それは一度見てみたいなあ」

そんなことを話しながら進んでいくと、

「八神はやて様、アイギス様、ナユタ様、お待ちしておりました」

綺麗なメイドさんが出迎えてくれた。

「ほおー…綺麗なメイドさんやなー」

「ありがとうございます。他の皆様は、すでに入らしてしますので案内します」

そうして、みんなの所に案内してもらったんやけど…

「ネコがいっぱい居るな」

私の前に沢山のネコが居る。

「あっ…はやてちゃん、ナユタさん」

「遅いわよ、はやて」

「こんにちは、はやてちゃん。今日は来てくれてありがとう」

なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんの順に声を掛けてくれる。

「こちらこそ、呼んでくれてありがとうな」

「えっと、ナユタさんも来てくれて、ありがとうございます」

すずかちゃんは、少し戸惑い気味にナユタさんに声を掛ける。

やっぱり、なれないとナユタさんには声を掛けづらいからな、まあ…兄ちゃんの場合やと付き合いも相当長いみたいで、気軽に声を掛けている。

返事は無いし、反応もほとんど無いから独り言観たいやけど全く気にせずしゃべっとる。

「……」

ナユタさんは、すずかちゃんの顔を見ただけでほとんど反応なし。

「ナユタさんのことは、いつもこんな感じやから気にせんでええよ」

「うん、ナユタさんはいつもこんな感じだけど、とてもいい人なの」

そう言って、私となのはちゃんがナユタさんのフォローをする。

そんな感じで、私たちは普段何をしてるか？とか他愛無い話をした。因みに、兄ちゃんはいつの間にか居なくなっていた。

side アイギス

俺はみんなから少し離れたところで、ナユタ達の様子を見ていた。はやて達は楽しそうに何かを話している。

ナユタの様子は相変わらずといったところだが、そろそろかな？

「ノエルさん、俺は用事が出来たと、はやてに伝えて下さい」

「わかりました。伝えておきます」

俺はなのは達の先回りをするため森には入った。

それから、暫くしてジュエルシールドが発動した。

それからすぐに封時結界が展開され、なのはとユーノが姿を現した。俺はデバイス『蒼牙』を展開し、姿を隠し、気配を殺し、神経を集中させて様子を窺った。

どうやらなのは達は、巨大ネコに声も出ない様子だ。

それはそうだろう、俺も知ってはいたが驚いた。

「百聞は一見にしかず」と言う言葉の偉大さを思い知った。
つと来たようだな。

遠距離からの射撃魔法、フォトンランサーがネコに突き刺さった。

そして第二射、フォトンスフィアからの連射。

次の第三射は、なのはがワイドエリアプロテクションで防ぎネコを守ったが、次の射撃で足元を撃たれたネコが転倒した。

フェイトは、なのはの近くにある木の枝を足場に着地、二人は睨み合いを始める。

それにしても、ユーノの奴はムカつくな、隠れて見てるだけだろ。などと考えていると、なのはとフェイトが会話を始めた。

「あなたが、わたしからジュエルシールドを盗った魔導師なの？」

「…違う、か…」（この子、魔力は強いけど、威圧感が無い）

おそらく、直感的予測によるとフェイトは俺のことを考えていたのだろう。

「?…えっと、何か答えて欲しいんだけど」

「私は知らない。けど、ジュエルシールドは頂いていきます」

フェイトは、バルディシュをサイズフォームに変形させ、なのはに

向かって跳躍、足元に向かって斬撃を放った。

なのははその斬撃をフライアーフィンで空に飛ぶことで回避する。

フェイトは空を飛ぶなのはに、アークセイバーで魔力刃を飛ばし追撃した。

なのははアークセイバーをプロテクションで防御、フェイトはその間に接近、アークセイバーを防ぎきったなのはに、更に追撃で斬撃を放った。

なのははこの斬撃をギリギリ、レイジングハートで受け止めた。

そのまま暫く鏖迫り合いをしていたが、双方同時に後方に弾かれる。着地した二人は、なのははレイジングハートをシューティングモードへ、フェイトはバルディッシュをデバイスフォームへ、それぞれ変形して構えた。

どうでもいいがこうやって実況するのもなかなか大変だなー。

睨み合いをしていた二人だが、目を覚ましたネコに気を取られたなのはに、

小声で謝りながらもフェイトはフォトンランサーを打ち込んだ・・・

第04話 「運命との邂逅」 (後書き)

作者、結局はフェイトは原作通りの登場になりました。

3、の設定も考えてあったんですが：

因みにどんなのかというところ、アリシアの生存でプレシアの狂気フラグがなくなったから、このまま行けばフェイトが出てこないから、ここでアイギスが介入、アリシアの妹が欲しいフラブを使いフェイトを創る。

この場合フェイトさんの年齢がかなりずれてくるから現時点でSt r i k e r S編辺りのフェイトさんになってくる感じで、更にアイギスに父親フラグが立つといったトンでも設定で話を続ける予定だった。

こちらのほうが話が面白そうだと思う方が多い場合はリクエストに答えようと思います。

なければこのまま話を続けたいと思います。

それでは次回展開予告

A、正体を隠したのはを助けに現れるアイギス。

B、颯爽となのはを助けに現れるアイギス。

C、なのはが気絶した後、フェイトに不意打ちをかますアイギス。

の三つの中から行きたいと思います。

ニーズには出来るだけ答えたいと考えている作者。

決して優柔不断なのではありません。

それではご意見・御感想・リクエスト、そして次回もよろしく願います。

第05話 「復活の偽神」 (前書き)

えっと、八神はやてです。どうぞよろしく！。

……。

なんや今回は、兄ちゃんが忙しいらしく、手が離せんみたいで、私とナユタさんがやることに成ったみたいです。

いやー、私もいきなりこんなとこ連れて来られて驚いてるんよ。

気が付いたらここにいて、ナユタさんからカンペ渡されて、しかもこれほとんど何も書いてあらへん。

このカンペによると、「俺は今回忙しい、近い内にゲストを呼ぶつもりだったから、はやてに任せる。関西人の乗りと勢いとアドリブでよろしく頼む。相方はナユタを使ってくれ」とのことや。

なんやろ、関西人が馬鹿にされ取る気がする。

これについてどう思うナユタさん？

……。

(あかん、これではボケも突っ込みもできん)

……。

えっと…、今回は何や兄ちゃんが漢オトコにあるまじきことをやってくれるそうや。

これは一言、言ってやらないかんかもしれんなあー……

そして遂にナユタさんが目を覚ますみたいやで、

それでは『無名王　りりかる　ナユタ』始めます！。

第05話 「復活の偽神」

フェイトのフォトンランサーに直撃を受け落ちていくのは。

なのは落ちる場所に駆けつけ、フローターフィールドで受け止め、助けるユーノ。

俺もどう動くか凄く悩んだ。

1、フェイトの砲撃を防ぎなのはを助ける。

2、フェイトの砲撃で吹き飛ばされたなのはを助ける。

3、この場はスルーする。

選んだのは結局3番だった。

何かユーノがなのはを助けて、いい所を持っていくので却下したかったのだが、1番はなのはに俺のことがばれるし、2番は目を覚ましたなのはにユーノが要らんことを言いそう、あれ？なんか淫獣余計なことしかして無くないか？

これも原作だからーとか思っていたけど、なのはと接触する前に殺っちまった方がよかったかな？流石にそこまではないけどミッドの病院にでも放り込んで置いた方がよかった気がする。

なのはは遅かれ早かれ魔法に関わったかもしれないが、その時は俺が何とかかければいいし、その方が面倒が無くてすむ。これはユーノに情けを掛けたせいで俺の計画に支障をきたしているのか？

俺は計画第一優先だが、助けられる奴は助けたいとも思っている。

例外も存在するし、その時の気分にもよるが……

自分が楽しめたらそれで良いとも思っている強欲な奴でもあるが、仕方ない次から気を付けよう。

などと俺が深く熟考していると声が聞こえた。

「捕獲っ！」

フェイトがシーリングフォームにしたデバイスで魔力の光球を作り出し、

それを地面に叩きつけた。

イカズチ
雷が地を裂きながら奔り抜け、猫に炸裂した。

バリバリと放電する猫の体から、ジュエルシードが輝きながら浮かび上がった。

「ロストログア、ジュエルシード、シリアル??、封印」

淡々とした声で呟きながら、フェイトはバルディッシュを天空に掲げた。

そこから雷が天に立ち上り、雷雲を造りだし、幾条もの光が降り注いだ。

そして、空に巨大な魔法陣が現れて、閃光が降り注ぎ、視界を白く染めた。

生で見るとかなりド派手な封印だ。

ここまでする必要絶対無いね。

ひょっとしてフェイトの趣味なのか、大人しい性格して実は派手好き。

色々溜め込むタイプの性格だから、日ごろの鬱憤を混めたストレス解消&八つ当たり♪

うお、なんて恐ろしい奴なんだ、流石閃光の死神。

白き魔王の相棒はこのぐらいできないと勤まらないのかっ!?

フェイトは封印されたジュエルシードにゆっくり近付くが、

「ご苦労だった。ゆっくり休め」

「!?! うっ——」

背後から姿を消し、気配を消して近付いた俺が一撃で気絶させた。
ゆっくりと倒れていくフェイトの体を支える。

俺は全身に施していた光学迷彩を解除する。

それにしてもやはり、かわい少女は男が守るものと思う俺としては心が痛む。

まあ、女性でも戦士の場合は例外だ。

戦いとは覚悟の有る者だけがするものだ。

中にはそれ自体を武器にするような奴もいるからな。

本当は正面から戦いたかったが、負けちまう可能性もあるからな。

俺、生身じゃそんなに強くからな、もっともそこは今の経験と

“モノ”で補うのさ。

それに、俺に恋愛フラグが立たないのはここ300年で証明済み。
そんなもの立つなら300年前オリヴィエに立てているわ!!

俺はどこまで行ってもいい人止まりだ。(人ではないが)

或いは乙女の勘が俺の内心を見抜いているのか。

くっ、俺にはナユタがいるから別にいいもんね。

悔しくなんか無いもんね。

そんな訳で俺は気絶したフェイトを担ぎ上げて、ジュエルシードを回収、早々にその場を去った。

因みにユーノに万が一姿を見られると不味いから、フェイトの封印に気をとられている内に、蹴飛ばして気絶させた。

ナユタに念話で連絡を入れてあるし、大丈夫だろう——たぶん

月村家から離れた森の中、俺はアルフと対峙していた。

「そんなに睨まなくても、この子は帰してやる」

フェイトをその場に降ろし、俺は後ろに下がった。

「どういう積もりだい？」

「特に無いが、何れ連絡すると伝えておいてくれ」

「……………」

アルフは無言のままフェイトを連れてその場を去った。

「ふうー」

俺は大きな溜め息を付いた。

やはりずっとシリ阿斯にしているのは辛い。

これで一応フェイトと接点を持てたし、プレシアどうすっかなあー。

しかし、とうとうジュエルシードが十個揃ってしまった。
本当なら諸手を挙げて喜ぶたいところだが……

「今考えても仕方ないことか……」

行動するなら早い方が良さだろう。

俺は準備を整える為とある奴に連絡を入れ、はやての家に帰った。

その日の夜、はやてが寝静まってから俺とナユタは家を出た。

それから次元転移を繰り返し、無人の管理外世界に来了。

この世界は、昔は文明が存在したようだが、今は廃墟となった遺跡があるだけ、その中で俺は神殿跡地に来ている。

そこには先客が居た。

「来たようだな」

「待たせてしまったか？」

「いや、たいしたことは無い」

俺が話しかけている相手は、三つの首を持つ狼で、尻尾のところから三匹の蛇が生えているケルベロスだ。

こいつは古代ベルカの技術で生み出された魔法生物で、遺跡を廻り旅をしている時に見つけ出した。大きさはアルフより二周りほどかい。現在ナユタの守護獣をしているが、完全に自立していてこいつ自身の意思で忠誠を誓い従っている。

もう200年以上の付き合いになる。

こいつとの出会いは、暇があれば話そう。

「それでガラム、首尾はどうだ」（ガラムは名前だ。由来は北欧神話から）

「あとは最終調整だけだ。ジュエルシードを出してくれ」

「ああ、わかった」

俺はデバイスからジュエルシードを出した。

ついにこの時が来てしまった。

なぜ、ナユタが意思を持つのにジュエルシードが必要か今まで話していなかったが、話は簡単だ。

デミウルゴスが稼働していなかったからだ。

正確には現在、低稼働状態で機能の八割は止まっている。

これをフル稼働させるには、リミッターを外し、起動のために大量魔力が必要だ。

ナユタに意思が無いのはリミッターと稼働状態でないのが原因だと考えた。

俺はこの300年の研究で漸くここまでたどり着き、リミッターを外す方法を探した。

残念ながら完全に外すことが出来なかった、最後のプロテクトがどうしても外れない。

だから過剰魔力でリミッターを破壊することにした。

ジュエルシードに目を付けたのは意志に反応するという特性も大きい。

うまくいけば、予想が外れていたとしても意思を持つ切欠になるだろう。

成功確率は五分、今迄で一番分が良い。

この程度の魔力では、デミウルゴスは壊れないのは判っているがどうにも心配だ。

「準備が終わったぞ」

「わかった。魔力制御は俺がやる。術式制御は任せた」

俺はもともとデミウルゴスの膨大な魔力制御のために作り出された。この位やり遂げて見せる。

「それでは始めるか」

ナユタを中心に巨大で複雑な魔法陣が現れた。

十個のジュエルシードも、ナユタを中心に浮かび輝き始める。

輝くジュエルシードから溢れ出した魔力が、渦を巻きながら中心にいるナユタに吸い込まれていく。

今俺の体には嘗て無いほどの負担が掛かっている。

全身にギリギリと引き裂け、バラバラに千切れそうなくらいだ。

それはガラムもおそらく同じだろう。

俺たちは、苦痛に耐え術式を完成させた。

視界は、ジュエルシードが放つ青い光に覆われ、体に衝撃が襲い掛かった。

そして、辺りに静寂が訪れた。

耳が痛いほどに静かだった。

突然寒気を感じた。背筋が凍り付くほどの強い寒気。

その寒気を感じる場所はナユタだった。

ナユタはさっきと変わらない場所で、佇んでいる。

そして、ナユタから強い魔力が放出された。

やばい、魔力光が虹色だ。それも只の虹色じゃなく反転色、黒い虹色だ。（因みに、今までは黒かった。俺も黒。ガラムは赤紫）

そしてナユタが口を開いた。

「我は、世界の創造主にして、観測者」

「……………」

やばい……話がどんどん嫌な展開になって来ている。

デミウルゴス、世界の創造主、観測者ってグノーシスのアレか？

この不完全な世界を作ったのは偽の神っていう話。

っていうか王じゃなくて神なのかよ！

内心は混乱していたが、とりあえず俺はナユタに近付き、片膝を突いて頭を下げた。

「我が主、お目覚められて何よりです」

「御主が我を目覚めさせし騎士か、今まで働き大儀であった」

「ありがたきお言葉。一つ伺いたいのですが、今まで何故眠っていたのですか？」

「我は嘗てアルハザードとの戦い敗れた」

「…何故戦ったのですか」

「奴らは私の持ち得る力を欲した傲慢な人間だった」

ナユタは瞳を閉じ淡々と語った。

それって、戦いに敗れたから意思を奪われたということですか？

あのリミッターは封印だったということですか？

まずい予感がする。これ以上はあまり聞きたくないが、聞かないと話が進まない。

「もしや我が主は、これから人間に復讐するつもりなのですか？」

「そのような事はしない。我は人間を好いている。人間ほど面白い生物は他に存在しないからな」

よ、よかった。なんか人類塵殺なんてことになるかと心配した。俺はここで人類を救うために戦うのか、人類を滅ぼすのかを選択しなければならぬのかと、考えてしまったではないか。

一説にデミウルゴスは傲慢なる悪神、なんて話があったから心配したよ。

「しかし、この世界の管理局なる連中は奴らと同じだ」

「……管理局と敵対するのですか？」

「我から戦いを仕掛けるつもりは無い。ただ降りかかる火の粉は、すべて払い除ける」

そうですか、管理局と戦うんですか。

こんなことに成るんじゃないかと思っていたよ。

まあ、今すぐそうなる訳ではないのが救いだな。

ああ、もう一つ聞くことがあったな、

「それでは、私のことはアイギスと及び下さい。貴方様はなんとお呼びすれば？」

「堅苦しい言い方はやめよ。我のことはナユタで構わん」

どうやら題名を変える必要は無いみたいだな。

「わかった。それではナユタ、改めてよろしく頼む」

「話は終わったようだな」

挨拶の終わった俺達に、今まで事の成り行きを見ていたガルムが近付いてきた。

「御主も今までご苦労だった」

「我は貴方達に仕える獣、気にすることは在りません」

ナユタが、ガルムに労いの言葉を掛けている。

「ではそろそろここを出ようか、管理局が来るかもしれないからな」

「いいだろう」

「わかった」

俺の言葉にナユタとガルムはそれぞれ答えこの場を離れた。

俺とナユタはとりあえず第97管理外世界へ、ガルムはフロンティ

アへ向かった。

第05話 「復活の偽神」 (後書き)

今回アイギスは見事フェイトに不意打ちをしてくれました。

そして遂にナユタさんが目を覚ましました。

以外にあっさり目を覚ましてしまったが、これから先どうなっているのか、

それではご意見・御感想・リクエスト、そして次回もよろしく願います。

第06話 「出たところ勝負」 (前書き)

お久しぶりです。アイギスです。

このSSでの戦闘描写は作者があまり自信が無いそうで軽く流した
いのが本音のようだ。

次にこの世界の魔法戦闘については、かなり作者の偏見と自己設定
が入っています。

スパロボ風に例を挙げるならベルカ式Ⅱスーパーロボット、ミッド
チルダ式Ⅱリアルロボット見たいな感じです。(一部例外あり)

何故こんな感じに成っているかというと、古代ベルカで魔法が対人
戦闘を前提とした瞬発力に重点を置いており接近戦に重きを置いて
いた。射程や範囲攻撃などがある程度度外視されていた理由が質量
兵器を使っていたことにある。

詰まり射撃や砲撃は実弾兵器を使っていたから魔法を使う必要が無
かった。

この戦争時代は激戦が続くので魔力は温存しなくてはならない。

実弾は補給すればいい、少なくともうちの国ではそうだった。

勿論提案したのも開発したのも俺だったが、
瞬間出力向上の為に開発されたベルカ式カートリッジシステムは実
弾装填式デバイスが原型に成っている訳だ。

この様な訳でベルカ式の使い手は防御重視の格闘戦が前提だった。
対してミッドチルダ式は距離を置いての射撃戦が前提だったからさ
っきのような例えになった訳だ。

いろいろ突っ込みどころが満載な設定だがそういうことだとスルーしてくれ。

さて、話を戻してついにナユタが覚醒？復活？しました。

いろいろとやばそうな感じだが、良い性格してそうだ。

これで俺の未来がどうなるかはある程度決まってしまった様な気がする。

俺的には事なかれ主義だが、この先作者の気まぐれでどうなるか……

俺は流れに身を任せられたらいいと思う。

もっとも気に入らないことをするつもりは無いがな！

判断基準は俺の気分しだいだ！！

今回はどうやらフェイトに会いに行くらしい。

どうなるかは予想が付くかもしれないが、敢えて言わないで置こう。

そんな感じで『無名王』りりかる ナユタ』始めます。

第06話 「出たところ勝負」

俺はナユタを目覚めさせ、今第97管理外世界に戻ってきている。そして、今現在進行形かなり不味い状態が続いている。

俺は今まで危機的状況でも諦めず、この拳で打ち砕き、或いはプライドを捨てて全力で逃げてきたが今回はそういう訳には逝かない様だ。

（言って置くが誤字ではないぞ、今までマジでそうやって逃げてきた）

「私の話し聞いとるのかな？」

俺が軽く現実逃避をしているとはやてが声を掛けてきた。

ここまで来れば今がどういう状態か判るだろうが、判りやすく説明しよう。

一言で言って、はやてさんがキレてます。

素敵で綺麗な笑顔が怖いです。

額に井桁が見える気がして、俺の精神衛生状、非常によろしくないです。

ここはとりあえず、

「すいませんでした！」

頭を下げる。それも土下座でっ！！

「いきなり書き置き残して居なくなるなんて、どういふことか説明してくれるんやろな？」

そう、俺ははやてに何も言わず書き置きとメモリ端末だけを残して家を出た。

「三日以内に戻ると書いて置いたし、そう怒るな」

「別に怒ってへんけど、戻ってこれんかもしれん、とも書いてあるで」

「それは万が一の時も考えて……」

「言い訳はせんでええで、それで結局何してたん？」

「それについては我が話してやろう」

「!？」

俺とはやての会話が始まってから、初めてナユタが口を開いた。そう初めて、ナユタは戻ってきてから一度も口を開いていない。今まで無表情で隣に座っていた。

今は口の端を吊り上げ、意地の悪い笑みを浮かべている。

はやては驚いた顔で固まっている。

イメージ的に劇画で驚愕!？って感じ、これはおそらくノリでやっているに違いない。

「なあに、我を目覚めさせる為に出ていただけよ」

ナユタは気にせず一言で片付けた。

はやてのボケは突っ込まれなかった。

「いや、スルーせんというて」

この後俺がはやてに補足説明。

そしてナユタの復活祝いをすることにして、買出しを理由に逃走。しかし今の時間は昼過ぎ、夕食の買出しには少々早いからフェイトに会いに行った。

因みに家を出てから念話でナユタにはやてのフォローを頼んだら却下された。

そんな訳で現在、念話で呼び出したフェイトと会っている。

どうやらフェイトとアルフは緊張しているようだ。

当然だろうな、俺はフェイトに不意打ちをかますような奴だからな、

「まあ、そう構えるな、戦うつもりは無い」

因みに俺はバリアジャケットだがラフな格好、上着にジーンズって感じ。

向こうはいつでも殺れるって感じの臨戦態勢。

「それでは、何の用で呼び出したんですか」

「実はプレシアに用が有ってな、今夜案内してほしい」

「母さんに？」

俺は用件を単刀直入に言った。

「フェイトこんな奴の言う事きかなくていいよ！」

「……………」

アルフは今にも飛び掛って来そうだが、フェイトは黙っている。

「只とは言わない。案内してくれるなら俺の持つジュエルシールドを渡そう」

「「!？」」

二人は驚愕を顔に浮かべる。

俺は取り敢えずデバイスから三つのジュエルシールドを取り出す。

三つの理由はなのはとフェイトから奪った数。

全部あげてもよかったが、一応保険は必要だと思った。

「…なぜ…ですか」

「俺の用は既に済んだからだ。悪い話ではないだろう」

「……………わかりました」

「フェイト!？」

フェイトが視線でアルフを抑えている。アイコンタクト…ではなくおそらく念話だろうが、どうやらアルフが引き下がったようだ。

「…どうやら交渉成立みたいだな。受け取れ」

俺はジュエルシールドの一つをフェイトに渡す。

「!…いいんですか？」

「ああ、残り二つは後で渡そう」

「…わかりました」

「では今夜零時にまた連絡する」

俺はフェイトに背を向けて歩き出した。

この後買出しをして家に戻った。

家に戻ったらはやてはナユタの昔話という冒険譚で盛り上がっていた。

この後はやてと料理を作ってお祝いをした。

三人だけだったがなかなか楽しめた。

ナユタとはやては二人で風呂に入っていたが、出てきたはやてはいつもより機嫌が良さそうだった。

ナユタも満更ではなさそうだった。

そしてはやてが寝てから暫くして俺とナユタは家を出た。

今回は明日用が有るから出かけると予め伝えてある。（同じ徹は踏まんよ）

時は少し遡る

side フェイト・テストロッサ

少し前にアルフに念話が有って私は今、私を不意打ちしたあの男と会っている。

「まああそう構えるな、戦うつもりは無い」

確かにこの人にそのつもりはなさそうだが、油断できる相手じゃない。

私は右手のバルディッシュを強く握り締める。

「それでは、何の用で呼び出したんですか」

「実はプレシアに用が有ってな、今夜案内してほしい」

「母さんに?」

アイギスの用件に思わず声が出た。

「フェイトこんな奴の言う事きかなくていいよ!」

「……………」『アルフ、ここはもう少し話を聞こう』

私はアルフに念話で話しかける。

「只とは言わない。案内してくれるなら俺の持つジュエルシールドを渡そう」

「「!?!」」

彼はそう言って、手に持つタグ（おそらくデバイス）から三つのジュエルシードを取り出した。

「…なぜ…ですか」

「俺の用は既に済んだからだ。悪い話ではないだろう」

彼は私の質問にそう答えた。

それはもう自分には必要ないということだろうか？

「……わかりました」

「フェイト!?!」

『私達はジュエルシードを集めないといけない、戦わずに手に入るならその方がいい』

『フェイトがそう言うなら…従うけどさ…』

「…どうやら交渉成立みたいだな。受け取れ」

彼はジュエルシードの一つを私に差し出した。

「!?! いいんですか？」

「ああ、残り二つは後で渡そう」

「…わかりました」

私は少し悩んだが、結局受け取る事にした。

「では今夜零時にまた連絡する」

彼はそう言い残し、背を向けて歩き去っていった。

「本当にこれでよかったのかい？」

「わからないけど、もしもの時は……」

「あの婆のことなら、心配なんて必要なんと思うけどね」

「確かに、そうかもしれないけどね……」

この後、私達はまたジュエルシードの探索を続けた。

夜になり家で休息しながらアイギスからの連絡を待った。

『今からそちらにナユタと二人で行く、屋上で落ち会おう』

念話は用件だけの短いものだった。

そして私達はマンションの屋上で二人と会っていた。

アイギスと供にいたのは黒い和服の上に赤と白の鎧を纏う蒼い髪の少女だった。

初めて見た彼女の第一印象は人形のようなだった。

side アイギス

俺は今時の庭園に来ていてフェイトがプレシアのところに案内している。

話が飛んでいるって？

仕方が無いだろう！こっちは緊張で息が詰まっている！

聞きたいのなら特に何も無かったと答えよう。

フェイトと軽く挨拶を交わしたくらいだ。

アルフは不機嫌そうな顔で黙ったまま、ナユタも無表情で黙ったまま。

アルフが不機嫌なのは俺たちと一緒にいるせいだろう。

これからプレシアに会うというのも理由にあるかもしれないが…

ナユタは喋る必要が無いからか、めんどくさいからだろう、或いは両方か？

それにしても何でこんなことになったんだか、やはり勢いで行動したからか？

行動が矛盾しているように感じるのは人間の心が複雑だということ、いろいろな有るんですよ…行き当たりバッタリだったり、そのときの気分がそんな感じだったり。

細工は流々ナユタの力を使えば生き返らせることが出来るだろう。俺の予測ではアリシアは仮死状態になっているはずだ、もっともすでに死んだことになっているが…

話がかなり逸れたがこれからプレシアさんに会うことを考えると気

が重い。

特にナユタさんのことが気になります。

この人が力を使うのは自分が愉しむ為か、相手を認めた場合のみ、今のプレシアさん相手では交渉なんて恐らくうまく逝かないだろう。

（凄く誤字で有ってほしい。あああゝ神よ！願わくば我が望み聞き届けたまえゝ）

俺は心の中で強く叫んだ。

「着きましたここです」

そんな時フェイトが俺に声を掛けた。
目の前には大きな扉がある。

「ああ、案内ありがとうございます」

俺は右腕を前に出し、デバイスから取り出した二つのジュエルシードをフェイトに渡した。

「えっと、ありがとうございます」

フェイトは少し戸惑い頭を下げながらお礼を言った。
とても微笑ましい感じがするなゝ♪

さっきまで胃に穴が開きそうだったがかなり和んだ。

「いや、フェイトが礼を言う必要は無いさ」

俺は思わず頭を撫でていた。
アルフが凄く睨んでいたが今は気にならなかった。

第06話 「出たところ勝負」 (後書き)

作者、遂にプレシアさんと出会う主人公。
そしてこれからの展開予告、予定？

- 1、やはりアリシアに生き返らせる。
- 2、アリシアは死んだままっ！！

とりあえずどちらか決めたいと思います。
それではご意見・御感想そして、次回もよろしく願います。

外伝 第01話 「私の冒険譚、その壱」 (前書き)

我が名はナユタだ。今はそう名乗っている。

今回は初の外伝をやることになった。

我が目を覚まし復活を遂げた記念みたいなものだ。

初の外伝は我が少し過去の話をしよう。

あまり面白みの無い話かも知れぬが心して聞くがよい。

それでは『無名王 りりかる ナユタ 外伝』始めるぞ。

外伝 第01話 「私の冒険譚、その壱」

我はデミウルゴス。

我は世界の創造主にして観測者。

もつとも、我自身、自分がどこでどうやって生まれたのかすでに覚えていないが、次元世界は無数に存在している。その中には我が作り出した世界も存在するのかもしれない。或いは存在したか、今の我にとっては些細なことかも知れぬがな。

世界の観測者であることは覚えてはいるが、それも今では趣味のようなもの。

我は永い時の間、世界を自身の力を使い見続け、世界の叡智を自身に刻み続けた。

そして、時には自ら赴き触れるようになった。

特に我が好いているのが人間だ。

同じ種で在るのに様々な文明を持ち、進化を遂げる。

そして争い続ける。

観ていて飽きることが無い。

永劫を生きる我には娯楽が必要だ。

しかし、今回は出過ぎたかもしれん。

今我の前には、鋼の鎧を身に纏う巨人が十体。

「ふうーっ、連中もしつこいのお……いい加減諦めたらどうじゃ」

大きな溜め息が出る。

今我はアルハザードの奴らに追われている。

奴らは高度な文明を持つ、それ故に我の持つ力に目をつけたのだらう。

人間は強欲な生き物だが、奴らはそれがより顕著に現れて居る。

私の予測ではその強欲さ故に遠からず滅びることになるだろうが、鬱陶しいことこの上ない。

「鉄屑ども、我は玩具で遊ぶつもりは無い！ 疾く、去ねっ！！」

もつとも、こいつ等が引き下がるとは微塵も思っていない。

命令に従い動く人形、破壊されねば止まらんだろう。

傀儡兵……種類は様々有れど、こいつは魔導機とも呼ばれる人型巨兵。

頭部には一つ目のモノアイが暗いシールドに覆われている。

魔力炉とバッテリーを内蔵する魔力と電力で稼動している機械。

全長約3メートル、陸戦型だがこの巨体で空も飛ぶ。しかし三次元機動は今一で空中での精密機動は出来ていない。

まあ、それも当然だろう、人は元々空を飛べる様に出来てはおらん。それ故にコイツは陸戦と謂われているんだが、それでも並みの魔導師に取っては脅威だろう。

コイツの装甲はオリハルコンで精製されている。対物、対魔力に強く、柔軟性もある優れた金属。並みの武装では傷は付かない上に自己修復機能を搭載している。止めるには動力部まで破壊するしかないだろう。

魔導機は我を円形に包囲する。

「やれやれ……」

我は自身の獲物を取り出す。

それは剣を上下に繋げた様な見方によっては槍や杖にも見える武器だった。

コアに偏四角多面体が在り、色はほぼ漆黒で、ところどころ赤い線が入っている。

これが我が作り上げたデバイス、トラペゾヘドロン。

待機状態はなく私の意思で何時でも取り出せる。

十全の力に耐えられるよう我が力を遣い作り上げた武具。

「木偶人形風情が身の程をしい！」

side ———

トラペゾヘドロンから伸びる漆黒の刀身が正面の一体を真っ二つに切り裂く。

それを合図に残りの魔導機も腕を砲身に変えて砲撃を開始する。

デミウルゴスは砲撃を引き付け頭上に跳躍して回避、そのまま右の魔導機に向けて中を蹴るように更に跳躍、一気に間合いを詰めて縦に一閃、次の上下の刀身を伸ばし回転して放った横薙ぎの一閃で左右に居た二体を二つに切り裂いた。

デミウルゴスの持つトラペゾヘドロンは上下に作り出せる伸縮自在の魔力刃が特徴、この剣の前では間合いが然したる意味を持たない。無論射撃や砲撃の補助としての杖にも使える万能なデバイス。

このデバイスはそれ自体に相当な魔力が内包されていてこれを使い繰り出す魔法はブーストされ相応に強力なものに成るだろうが、それ故に常人にはこの魔力を完全に制御し扱うことは出来ないだろう。

「脆いものよのう、この程度では私の相手は務まらぬぞ!!」

デミウルゴスの叫びと共に振るわれた腕より放たれた広域魔法が残り六体より放たれる砲撃諸共全てを吹き飛ばした。

辺りは一面焼け野と化していたが魔導機は尚原形を留めていた。

中にはまだ動こうとする物も存在したが次には放たれた雨の様に降り注ぐ魔弾に碎け散った。

辺りには一時的に静けさが戻ったが、

「今日は千客万来じゃの、そろそろ出てきたらどうじゃ」

「まあ、呼ばれたからには出て行こう」

いつの間にかデミウルゴスの後方に一人の漆黒の外套を纏う男が立っていた。

外見20代中ごろ、身長180超、体形少し痩せ型で浅黒い肌をした男。

「御主が態々出向いてくるとはどういう風の吹き回しだ?」

「俺自身あまり気が進まないが、一応命令でね」

「他者の命など聞くつもりも無かろうに」

「確かにその通りだが、お前と戦うのに異論は無い。お前が居れば俺の研究も捗る」

「それは我に勝てたらの話であろう」

この男、名をアブドウル・アルハズラット、アルハザード最強の魔導師と謂われると同時にアルハザード1の変わり者、変人とも謂われる男。

この男が最強と謂われているのはコイツ自身が創り出した魔導書型デバイス・ネクロノミコン、そのマスターであることが所以である。

ネクロノミコンはアブドウルの魔導研究成果で、凡庸な術式から特殊な術式の魔法まで総数666の魔法が記されているらしい。（この術式には下らないものや使えないもの、笑えるものまで数多く存在する）

この記された魔法を制御し使用する為にネクロノミコンには管制人格兼ユニゾンデバイスであるアル・アジフが存在する。

しかし、残念ながらこのアル・アジフかなり気難しい性格をしている上にネクロノミコン自体特殊なので扱う為には相当な適正を持つ者で尚且つアル・アジフが認めるに値する者でないとならない。（デミウルゴスとは仲がいいらしい）

因みにアル・アジフは魔導書型のデバイスであるが、普段人型をしている為本型になることも魔導書を出すことも滅多に無い。(アル・アジフが取り出す魔導書は本体の端末である)

あとアブドウルが変わり者、変人と謂われるのはこの男の行動や研究内容が常人には理解し難いものだからである。(外見や言動が一見まともに見えるのが性質が悪いと評判、因みに実年齢は外見の倍はあるらしい)

例を挙げるなら現在、人の欲求・欲望について研究していた筈が何故か食の探求をしている。(これはかなりいい例でこの前に笑いであると結論を出し、その道を窮めんと旅に出ようとしたところで、アルに半殺しにされ一からやり直したらしい)

そんな感じの男ではあるが実力は本物、デミウルゴスが認める数少ない男でこの二人の付き合いは長い、時と場合によっては意気投合することもある。

ここ数年の間はデミウルゴスがアルハザードに追い駆けられるようになってから幾度となく戦っている。

この二人が戦うようになった切っ掛けはアブドウルの保護をデミウルゴスが断ったことに始まる。

※回想

「断る、御主の頼みでも其れは聴けんのう」

「何故だ？ 俺と供に居れば連中も簡単には手を出せんだろう」

「残念ながら……我は拘束されるのが何よりも嫌いじゃ!!」

「俺にそんなつもりは無い」

「喩えそうだとしてもじゃ」

「このままでは追われ続けることになるぞ」

「降りかかる火の粉は全て払い除ける。我を従えたくばその力、示してみろ」

このような遣り取りの末に現在のような状態が続いている。

今までの戦闘はデミウルゴスの全戦全勝だが、この二人にとって戦いは趣味に近いところがあるので全力戦闘ではあるが、それほど勝ち負けにそれ程拘っている訳ではないようだ。（非殺傷設定が使えるのが魔法の便利なところ、常人ならショック死だろうが……）

デミウルゴスはトラペゾヘドロンを右手に持ち半身に構え、アブドウルは1メートルはある月型の刃を持つ偃月刀を顕現させ正眼に構えた。

「先手は我が貰う！　ン・カイの闇で眠れっ！」

デミウルゴスは後方に跳躍しつつ左手を突き出し11発の闇色の高重力弾を展開し撃ち合った。

アブドウルはその身に纏う外套をツバサに変じ上空に飛翔したが、尚迫り来る高重力弾に自身も11発の魔力弾を放ち迎撃した。

高重力弾は魔力弾の着弾と同時に炸裂、その場に高重力球を作り出

した。

アブドウルは魔力弾の着弾を見届ける事無く背後に偃月刀を一閃した！

ガキツッ！

甲高い音を立て背後より迫り来る斬撃を受け止めた。両者共に鏖迫り合いの状態になるが、

「オオオオオオッ！！」

アブドウルの叫びと供に偃月刀が炎に包まれ、一気にデミウルゴスを弾き飛ばした。

デミウルゴスは弾かれた反動を利用して後方に飛翔した。

アブドウルは追撃に炎に包まれた偃月刀を投擲、偃月刀は高速回転しつつ不規則な軌跡を描きながら七つに分裂し、デミウルゴスに襲い掛かる。

「燃える三眼」

扇状に三つの瞳が並んだような魔方陣より放たれた暗き三つ焰が、三つの偃月刀を消し去った。

残りは上空を高速機動しながらトラペゾヘドロンの刀身を引き伸ばし、追尾してくる四つ全てを叩き落した。

「原初の炎よ、南方の果てより来たりて、我が敵を燃やし尽くせ！
灼熱の国！ ムスペルヘイムッ！」

アブドウルの詠唱より放たれた広域炎滅魔法は上空一面を燃や尽く

した。

辺り一体を白い煙が覆っていたがそれもすぐに晴れていき、煙の中から現れたのは宙に浮かぶ漆黒の結晶体、その結晶体には”ピシィッ”と音を立て徐々に亀裂が走り、最後には砕け散った。

中からは悠然と佇むデミウルゴスが現れた。

アブドウルに驚いた様子のなく寧ろ当然といった顔をしている。

どうやらこの二人にとってはまだ前哨戦のようだ。

常人ならこの場にいるだけでも軽く数回死んで要るだろう。

「座興はここまで、そろそろよかろう」

「ああ、貴方との戯れは名残惜しいが、決着を付けよう」

双方一定の距離を保ち再び獲物を構え対峙した。

「アルハザード・ランプよ！ 我が魔力を糧に燃え上がれっ！！」

アブドウルより大氣が震えるほどの魔力と威圧感がヒシヒシと辺りに拡がっていく、デミウルゴスはその様子を不敵な笑みを浮かべながら眺めている。

「やあっ！」

「ハアッ！」

動いたのはほぼ同時、双方共に魔力による斬撃を撃ち放ったと同時に突っ込んだ。

魔力は中央で激突衝撃破が四方に飛散したが二人は臆する事無く剣による討ち合いが始まった。

二人の剣舞は空中を駆け回る高機動による連続の討ち合い、しかしそれも長くは続かず、デミウルゴスはアブドウルの偃月刀を闇に溶けるかのような短距離転移で避けし離脱して、

「這い寄る混沌よ、全てを飲み込めえ！」

デミウルゴスより暗き砲撃魔法が放たれた。

その砲撃は言葉通り全てを飲み込むが如く迫り来る。

「魔を退けよ！ エルダーサイン！」

アブドウルの前に浮かび上がる五亡星の魔方陣は迫り来る闇全てを弾いた。

そこに詠唱が響いてくる。

「深遠なる母よ、混沌なる大地よ、冥府へ誘いし黒き星よ…」

デミウルゴスの頭上には暗き光球が徐々にその光と大きさを増し浮かんでいる。

光球には環状魔法陣が幾重にも奔り、その周辺も魔法陣が囲んでいる。

「クッ…旧き支配者が一柱、焰の化身よ、生ける炎よ…」

アブドウルも詠唱を創め、その正面には色彩を変える大きな火の玉が超高熱のプラズマ塊として顕現しその大きさを更に巨大なものにしていく、

「我が呼び声に答え…」

「フォーマルハウトより来たりて…」

両者の術式はほぼ完成、あとは掛け声一つで圧縮された魔力が開放されるだろう。

二人の視線が交差する、そして：

「落ちろ！ 暗黒星ユゴスッ！」

「咆えろ！ クトゥグアアアアアッ！」

同時に放たれた魔法は正面から激突した。其処から生じた凄まじい閃光と衝撃は全てを吹き飛ばした。

何もない荒野と成り果てた大地に一人の男が剣を杖に立っていた。

「ハアッ…ハッ…」

立っているのがやっとの様子のアブドウル
そこに差し掛かる影、アブドウルが気付き空を仰ぎ見た時にはすでに遅く、

刃が己を二つに引き裂かんと迫っていた。

一閃、 直上からの唐竹割りっ！

次の瞬間アブドウルはガラスの如く碎け散った。

デミウルゴスはアブドウルを切り裂いた場所で立ち尽くした。

「ほおう、まだ小細工をする余力が有ったとは、少しは腕を上げた様だな」

デミウルゴスは語り掛けるように呟いた。

すると背後の空間に亀裂が走り、音を立てて砕け散った。

そこには偃月刀をデミウルゴスに向けて構えるアブドウルが居た。

その姿は致命傷は無いが、まさに半死半生、ボロボロだった。

「その様子では、我を倒し得る一撃を放つことは無理そうだな」

「……………」

アブドウルは沈黙で返し、ゆっくり構えを解いて刃を退いた。

デミウルゴスもゆっくりとアブドウルへ向けて振り返った。

”フツ”

どちらとも無くそんな音が聞こえ両者共に微笑を浮かべる。

その時上空より閃光が走った。

二人は同時に後方に跳躍。

次の瞬間、爆発、轟音が響き渡る。

それを切っ掛けに続く爆撃が絶え間なく降り注ぐ…

砲撃が止み、空に浮かぶ数十機に及ぶ重装備の魔導機、広がる大地は未だに煙に包まれているが、それを引き裂き現れる闇が魔導機全てを飲み込んだ。

「無粋な奴らじゃ…」

重度の爆撃を受けて尚大地に悠然と立つデミウルゴス。その視線は空には一瞥を呉れただけで別の所に向いている。視線の先にはアブドウルが倒れ伏していた。デミウルゴスはゆっくりと歩を進めた。

「どうやら生きとる様だな、御主も存外しぶといのお」

「フツ……お……れに……まだ……くた……ばる積りは……無い」

「ムツ……流石に辛そうじゃの」

デミウルゴスは右手をアブドウルに向けて翳した。アブドウルの上に魔法陣が現れ徐々に光を強め始めた。

「待て……、何……をする気……だ……」

「御主を転送する。ここは些か騒がしくなりそうだからの」

上空には続々と魔導機が転送されて来て、その数を増やしている。

「待……て……」

「なあに、私の気が向けば何れまた会えるだろう。アル・アジフ、この馬鹿を頼む」

『心得た』

「…デミ…ウル…」

アブドウル呼びかけは最後まで続く事無く転送された。
そしてその場に残されたのはデミウルゴスと上空に浮かぶ数百の魔導機。

「誠、無粋な奴らじゃ、今の我は頗る機嫌が悪い。鉄屑風情が我が力拝めること光栄に思うが良いッ!!」

side アイギス

「この後、我はアルハザードとの総力戦の末に敗れ去った。力尽きた我は永き眠りに付く事になった。しかし、我も唯敗れた訳ではない、我の残りの力全くと引き換えに虚空の扉を開き、奴らの世界丸ごと虚数空間に叩き落してやったっ!」

「へえ、それはすごいな」

「ああ、この我に禁呪を使わせるとは、連中の執念、恐れ入った」
今リビングでナユタがはやてに自己の冒険譚を笑いながら話している。はやては楽しそうに笑いながら聞いているが今一解ってないよ

うだ。俺にとってはかなり危険で衝撃的な冷や汗流れる話だった。

それでも二人とも楽しそうだったし、それでも良いかなっと思う今日この頃。

なんか小話にオチが付いた様に成ったがスルーしてくれっ！

それでは、機会があればまたやりたいと思う！

外伝 第01話 「私の冒険譚、その壱」 (後書き)

VPも1万超えたし、外伝投稿。

これからも応援よろしくお願いします。

それではご意見・御感想そして、次回もよろしくお願いします。

第07話 「死亡フラグ？」（前書き）

どうもかなりお久しぶりです、アイギスです。

前回は何と初の番外編（外伝）をやったわけです。

ナユタさんの過去のお話です。

謎に包まれたアルハザードをメインにしたが、結局殆ど出て来なかった？

他にオリキャラも新しく出てきたようで、お楽しみいただけただし
ようか？

俺としてはナユタさんの新しい追加設定に衝撃を受けた。

まさかアルハザードを滅ぼしていたとは、驚きだっ！！

さて、それでは今回は初の特別ゲストを俺が呼びしています！

（俺が紹介する、ゲストは今回が初めてだ）

それでは自己紹介を元氣よくどうぞ！

どうも♪ アリシア・テストロッサです！ よろしく願
いしま〜す♪

元氣にア〜リガト〜ウツ！

ここで裏を搔いて未登場キャラを出してみました！ （何の裏かは
不明）

なんかテンション高いですね〜？

ああ、実は本編では暫くシリアスが続きそうだから今の内にテンシ
ョンを上げているのだ！

本音としてはギャグを入れて軽く行きたいが、恐らくそんな訳にも行かないだろう。

どうせ本編では大変だから、ならば今の内に愉しんどくべきだろう。

大変なんですねえ♪

私も本編での出番がもう直ぐなんですよね、楽しみだな♪

確かに出番はもう直ぐだが、台詞が有るかどうかは分からん！

正直、生き返るかどうかも分からん！

どういう事ですか？

話の進み具合が余り芳しくないような気がする。

俺も生き返らすつもりで話を進めて来たけど、保証は出来無いからな

ガ、ガーン！

そ、そんな、期待していたのに、私に出番が無いかもしれないなんて、あんまりだ！

ひ、酷い少女の心を弄んだのねっ！

（な、なんてオーバーなりアクションだ！ 少し前から思っていたが、ここでは台詞しかないからリアクションが表現できない！ 俺の表現力が足りないのか？ 一体どうすればいいんだ。はっ！ まさかこれは俺の司会進行としての技量を試されているのかっ！！

すいませ〜ん、考えがおそらく途中からもれてますよ。

……オホン。

まあ、そんなに悲観するな、もしも生き返らない場合は、俺が過去

回想を入れてやるから安心しろ。

（うわぁ、何事も無かったかのように流した）
そんなポットでキャラなんか、不満全開だ！

元々原作過去回想でしか、出番が無かったでしょう。
其れになんか原作と性格が違いくね？

細かいことを気にしない♪ 気にしない♪
そんなことより私の出番があるか無いかの方が大事！
フェイトに会えるの楽しみにしてたのにい！

その辺りの事は作者と読者にでも期待してくれ、
まあ、どうしてもというなら、こんどここに連れて来て会わせてや
ろう。

え！？、それってほんと？

ああ、何せここは前にも言ったが本編とは関係ないからな！
ここなら俺の権限で好きに出来るのだ！！

（もっとも、今度が何時になるかはわからんがな）

おおっ！すごーい！

“パチパチパチ”

拍手ありがとう。

それではそろそろ本編に行ってみよう。

わかりましたっ！

今回ついにママが登場！

私の出番は有るのか無いのか？

それでは『無名王　りりかる　ナユタ』始めたいと思います。
ところで何で無名王？

知らん！

敢えて言うなら、おそろく勢いだっ！

第07話 「死亡フラグ？」

さて、プレシアとの対面だがどうなるか？

最悪戦闘、いや、殺すことも考えなくてはならないが向こうの出方しだいだな、今のプレシアが果たしてどのような常態かでこちらの対応も変わってくるからな、原作ではオレ的に不自然に回りくどい事していたように思える。

しかし、実際に会ってみない事にはわからない。

ここは覚悟を極めよう。

状況に対し、臨機応変に対応しよう。

（前から自覚してたけど、実は俺ってかなり行き当たりバッタリな行動しているなと思う）

俺は自分に悪態を付きながらプレシアに対面した。

こういうのは何だが、部屋の雰囲気と相まってRPGのボスのような感じで、更にそれっぽい椅子に腰掛けていらっしやる。

「ようプレシア、久しいな」

取りあえず軽い感じに挨拶してみた。

「アイギス、久しぶりね。 今更何の用で私に会いに来たの」

確かにその通りかもしれないが、そんな言葉はまったく気にせず。

「それは勿論勧誘に来たのさ！ 我がエンドレス・カンパニーにっ
！」

エンドレス・カンパニー、通称E・C・

俺が作り上げた創設300年を超えるフロンティア1の複合産業体、世界移住に対し、都市開拓から食糧生産まで一切合切を引き受けてきた。

今では次元世界でもかなり有名な一大企業になっている。

特に質量兵器を扱っている企業では、確実に内がトップだっ！

フロンティアは管理外世界、文句など受け付けるつもりは全くないっ！！

因みに会長がナユタさん、社長がAI（Artificial Intelligence）で名をノイン・ユグドラシル、愛称ノイちゃんが社の運営を略一手に引き受けている。

E・C・はフロンティアのエンドレスシティに本社を構えていることになっているが、実際は支部で本社はノイン本体の演算装置が積み込まれたXXL級次元航行艦『はこぶね・ノア』

この船は世界移住の時にも活躍している。元々俺がゆりかごに対抗しようと秘密裏に造っていたのだが、フロンティアは小国、残念ながらほとんど予算は無く細々と造っていたのだが、世界移住が決定した際にこれ幸いと予算を次ぎ込み造り上げた。

最も当時は急造戦艦だったからたいした事はなかったが、現在に至るまで改修を繰り返し、現存する中ではおそらく最強の戦艦へとなった。

因みにこのことを知っている者は小数で、ナユタがフロンティア王だということを知っている者は、殆んどいない。

話が大幅ずれたが、兎に角プレシアには我が社に勧誘という名目で会いに来た。

「フェイトを見たときにピンと来たんだ。

あんたアレつきり消息不明になっていたからな」

「……フェイト下がりなさい。私はコイツと話があるから」

「解りました」

フェイトはこちらを気にしていたようだが、背を向けて去っていった。

俺は軽く手を振りながら見送った。

因みにアルフは扉の前で別れたから、最初からココにはいない。

「それで何の用が有ってココに来たの」

「いや、だから勧誘だって」

「………」

「実はフェイトがジュエルシードを集めていたからな、何に使うのか気になってな」

俺は真面目な顔をして答えた。

決してプレシアの視線にビビった訳ではない。

原作では、アルハザードを求めていたが、すでに滅んでいる世界だからな、それも確実に、

「無論アリシアのためよ、貴方も解っているんじゃないの」

「……やはり、まだアリシアに拘っていたのか」

「当たり前じゃない！ アリシアは私の全て、必ず生き返らせて見せる！」

病んでるなく、どうやらなかなか難しいそうだな、

「ジュエルシードを何に使うんだ」

「次元の狭間に眠りし楽園、失われし都アルハザード」

「うゝむ、今更滅んだ都に何のようだ？」

「あそこになら必ずある。アリシアを取り戻す手段が、私にはもうそれしか残されていない」

「：因みに、アリシアが生き返ったらフェイトはどうすりつもりだ」

「あの子の魔力資質は高い、放って置いても管理局が保護するでしょう。」

別にあなたが連れて行っても構わないわ」

ということは原作でもそのつもりだったのか？
しかし、やはり捨てるつもりだったのか、

「それは、フェイトを捨てるということか？」

「そういうことなるわね」

沈黙、そして静寂、あたりの空気が重くなったように感じる。
うむ、ここはフェイトだけでも貰っておこうかな？ などと妥協を
考えていると、

「下らんな」

静寂を破ったのは今まで沈黙していたナユタ。

今までずっとそばにいたが、静観を決め込んでいたナユタさんがついに動き出した！

決して状況が緊迫してきて忘れていた訳では無い。

寧ろ嵐の前の静けさのように感じていたから思い出さなくなかった。

「何ですって」

プレシアの鋭い声にナユタは一步前が出る。

「下らんと言った。人は遅かれ早かれ死ぬ。ならば限りある生を生き足掻けばいい」

「随分な言い草ね、人形のようにだった子がよく言う」

「我は不死故に汝らとは生に対する概念が違うからに過ぎぬ。それに汝らの探り合いなどに興味はない」

「減らず口を」

やばい状況がどんどん悪くなっているような気がする。

しかし、俺には止められそうに無い。

「喩え娘を生き返らせても、貴様それほど長くは持つまい」

「!?!?」

プレシアの表情が一瞬驚愕にそまり目付きが更に鋭くなる。
どうやら原作同様に病を患っているようだな、

ナユタさんの態度は高圧的で、他を圧倒する迫力がある。
まるで全てを見下しているようだが、それが様になっている。
しかし、こうなると三拍子揃ったナユタさんが懐かしく感じるな……

明後日の方を向いき遠い眼をした俺の瞳の端にはおそらく涙が滲んでいたと思う。

「そこまでして娘に会いたいのか？」

「私は必ずアリシアを生き返らせて見せる」

「そこまで言うなら、我が生き返らせてやろうか？」

「「!?!?」」

な、なんですとっ！

ナユタさんは口の端を吊り上げながらそんなことをのたまった。
俺とプレシアは驚愕、ナユタさんがそんなことを仰るとは一体どう
いうことだっ!？

「……貴女にそれが出来るというの？」

射殺さんとするような鋭い視線がナユタに向かう。
ナユタはそんな視線を軽く受け流す。

「我に取ってはそのような事は些事に過ぎんが、ココは一つ座興を
行おうか……」

ナユタさんは顎に手を当て、何かを悩み考え込むようなポーズをとる。

激しく嫌な予感がする。冷や汗が止まらない。

お約束かもしれないがこういう予感は外れた例が無い。

そして、ナユタさんはこちらに瞳を向けて、ニヤリと口元をゆがめる。

「こやつ、アイギスを倒して見せろ、然すれば汝の望み叶えてやる」

こちらを親指で指し、そんなことを言いました。

な、何てことだ！ あっさりと俺の死亡フラグを立てて下さった。

「それは本気で言っているのかしら？」

「無論だ、この世で自らの意思を押し通せる者は力有る者のみじゃ」

何てことを言ってくださるんですかこの人はっ！！

確かに言ってることは間違っていないと思う。

力と一口に言っても暴力、知力、権力と様々に存在する。

そして自らが持ちうる意思も、それは意志力や精神力などやはり力に相当するものだろう。

しかし、今ココでそれを試そうというのか！？

すいません、かっこ付けました。

正直逃げたくなりました。

ひょっとしたら此れは、プレシアだけでなく俺の力も測っているの

かもしれない。

だとすれば俺は其れに答えねば成るまい。

まあ、真意のほどは解らないけれど。

「……」

プレシアも事の真偽を計り兼ねている様だ。

「汝は如何するのだ、汝が克てば娘は生き返る。

ただし、負ければ全てを喪う。娘二人は我が貰う」

「「!？」」

ナユタから凄まじい魔力とプレッシャーが発せられる。

これは並の人間では身動き出来んどころか息も詰まるだろう、魔法を使っている訳でもない、特に何もしていないがこれはもはや一種の結界レベルだ。

それに今娘二人って言った？

それってフェイトとアリシアのことだよな、アルフは数に入っていないだ……

じゃないな、本当に何を考えてるんだ！

まさか、状況を愉しんでいるだけじゃないだろうな……有り得そうだな。

「……いいわ、その話し受けましょう。代わりに——」

「判っている。心配せずとも我は約束を違えた事は無い」

どうやら話は纏まったようだな。

「それではプレシア、何の因果でこうなったのかは解らないが手合
わせ願おうか、大魔導師と謳われたその力、見せてもらおう」

「後悔することになるわ」

「双方供に地に伏した方が負けだ。手段は問わず全力で遣るがいい
っ！」

ナユタはそう言い放った後、颯爽と身を翻し、後方へ下がって行っ
た。

プレシアも立ち上がり、杖を構えた。

どうやら俺を殺ル気満々のようだ。

一寸泣きそうだ…

どうやら早くも無印編がクライマックスを向かえそうだ。

何でこうなったんだろう。これではなのはとフェイトのイベントが
見れないではないか!?

結構楽しみにしてたのに、まあこれも仕方が無い。如何転ぶかは解
らないが、管理局が出てくる前にケリを付けたいし、最近家の周り
で偶に猫を見かけるし……いろいろな面白くなって来たっ！

第07話 「死亡フラグ？」（後書き）

今回は初めてアイギスがまともに戦うようだが、戦闘自体は余り期待しないでくれ、

今までの内容で解ると思うが、戦闘は一撃必殺が心情、そんなに長くは成らないと思うので、そこんとこよろしく。

それではご意見・御感想そして、次回もよろしくお願いします。

第08話 「早くも決戦!!」 (前書き)

こんにちは、前回から少し大変なことになっているアイギスです。少々胃が痛い気がします。

たいして意味はありませんが気休めに胃薬が欲しいです……

それでは気を取り直して、今回のゲストを紹介しましょう。
ナユタさんです、よろしくお願いします。

我がナユタだ。よろしくのう。

えーっと…、なぜここに？

今回我は見届け役だからのう。

事が始まる前に激励の一つの掛けてやろうと思っの。

それは、わざわざありがとう御座います。

(くうく、なんてことだ！ 一寸涙が出そうだ)

そう畏まるな、精々我を愉ませろ。

グウツサァー!!

(ぐうはあく！ その眼差しで胸に穴が開きそうです)
判りました。誠心誠意努力したいと思います。

うむ、期待しているぞ。

：ところで前回この話のタイトルについて話題が出たのですが、どう思います？

さあな、我の異名の一つではないか？

そうなんですか？

アルハザードの奴らは我を偽神^{ナイン}などと呼んでいた。他にも造物主、混沌、フォルマティオ、ヤルダバオートなど、古代ベルカの歴史に残るフロンティア王、別名虚王も我の事だろう。もつとも、我自身全てを把握しているわけではないがな。

そうですか、推測ありがとうございます。

それではそろそろ本編を始めたいと思います。

今回はプレシアとの決戦、それではナユタさん、よろしくお願いします。

では、『無名王　りりかる　ナユタ』そろそろ始めるぞッ！

第08話 「早くも決戦!!」

さて、気分はラストステージ、ラストバトルと言った所か？

冷静に戦力分析してみると俺が勝てるか正直微妙なところかな、プレシアは腐っても大魔導師、病気であることを差し引いても簡単にはいかないだろう。

俺が勝機を得るには接近戦に持ち込むしかないだろうが、そんな事は相手も十分承知しているだろう。簡単には近付くことは不可能だろう。ならば、いつもの如く必勝の型を全力で叩き込むしかない。それで駄目なら臨機応変に野となれ山となれ！

「準備は整ったようだよ」

壁際まで下がったナユタが話しかけてきた。

俺は爪射抜の構え、プレシアは杖を自然体で構えている。

「それでは始めるがいい！」

先手必勝っ！ 俺は『武威』を発動し、

「カートリッジロードオッ！ 爪射抜！」

俺は十数メートルあった間合いを一気に詰めた。

そして、右の手刀はプレシアのシールドに突き刺さった。

「はああああっ！」

か、硬い！

しっかし！ この程度でと止まる訳にはいかん！
俺は更に左の二発めを叩き込む。

「うっおおおお！！」

「くうっ」

俺は更に力を入れ、シールドにヒビを入れた。
しかし、紫電が奔ったと思ったら、バリアバーストで後方に吹っ飛ばされた。

俺は体勢を立て直しつつ着地したが、

「っ！？」

そこに迫り来るフォトンランサーの連撃！
俺は何発かを両腕で弾き横っ飛びで避ける。

「！！ マジかつ！」

フォトンランサーを避けた俺の上空、迸る紫電。
それは雷と成って俺に落ちてきた。

ガッシャン！ ズッガーン！ バリバリ！ ※イメージ

雷の直撃を受けた俺は焼き加減レアって感じ、とっさにカートリッジロード、パンツァーガーストを使いダメージを軽減したが、かなり効いた。が、俺は即効反撃！

「カートリッジロードォ！ 玄武剛弾！」

俺は両手に魔力球を作り、拳を交互に突き出し、撃ち放った。魔力球は回転しながら轟音を上げて、プレシアのシールドにブチ当たった。

プレシアのシールドは俺の玄武剛弾をもともせず受けきった。プレシアは顔を顰めただけ、まあ判ってただけだな。

「うおおおおお！」

俺は玄武剛弾を匣に上空からの追撃！

しかし、プレシアの放つ雷により正面から迎撃される。

俺は拳に纏う魔力を開放し相殺、なんとか受けきった。

「ハアッ…ハアーツ」

「ゴホッ…ゴホオン」

両者間合いを開け小休止、プレシアは口に手を当て咳き込んでいる。やはり強い、というか少々無謀だったか！？

ここは勝負を長引かせて疲弊するのを待つか？

セコイとか言うな、戦略と言えっ！

基本魔力は向こうの方が大きいんだ！

お前にはカートリッジが有るだろってか…細かいことは気にするな。

そんなことを考えてるとき、プレシアが杖を地面に一度撃ちつけ魔法陣を展開。

部屋中に魔法陣が展開され傀儡兵が現れた。

どうやら物量で攻めるようだな、少々不味いかもしんない。

傀儡兵は俺に四方から襲い掛かってくる。

俺は向かってくる奴を片っ端からぶっ壊す！

「うらあ！ どらあーっ！ があああー！！」

ドガッ！ バゴオッ！ ガスウン！！

人形相手に手加減する気はねえ！

俺は『激』、『砕』、『震』を遺憾なく遣いバラバラにする。

対人技と侮る無かれ、この程度は応用の範囲内だ。

魔力の纏った拳や蹴りは容赦なく敵を破壊していたが、

「うおっ！」

プレシアの射撃が死角から飛んでくる。

更に動きを止めると雷が落ちてくる。

俺はなるべく死角が出来ないように、地を這うように移動し、動き止める事無く傀儡兵を屠っていたが、このままではジリ貧！ って言うよりも限界に近い。

傀儡兵は新しいのが次々出て来ている。

動きは単調だが切りが無い、ここはプレシアに狙いを絞るべきだろうが、周りの防御を固める中型・大型傀儡兵が邪魔で近付くのは難しい、どうやら装甲が厚いのを集めているようだ。

仕方ない、アレ使うしかないか！

「カートリッジロードオ！ 青龍砲・散！」

俺の放った魔力散弾は大型のバリアに受けられたが、プレシアの視界を奪うには十分だ。

僅かばかりの時間を稼いだこの隙に、

「蒼牙、アーマードフォームッ！」

そして俺は魔力光に包まれた。

魔力光から現れたのは蒼い鎧を纏った巨人だった。

「なにっ！」

プレシアが驚いた表情をしている。

此れこそ俺のデバイスの新の姿！

俺の作り出したアーマードデバイスだ！

もっとも、俺のは特別製。

全長3メートルを超える蒼き巨人、モデル… アークゲイン

コイツを使えばバリアジャケットの必要無し。

俺自身のスペックが低いのなら、より強い体を持ってくればいいのだ。

元々ユニゾンデバイスの俺は大きさや形に拘る必要はない。

フェイトとは逆ベクトルに防御を固めたオリハルコン装甲！

しかも、スピードが下がったつもりは無い！

武装は肘のブレード、脚部炸裂リボルバーに加えて腕にカートリッジ式大型リボルバーを装備。

動力に魔力、サブ動力に電力で稼動。

空戦に少々難があり、空中での機動力が低く、飛行魔法で飛ぶよりは、魔法陣で足場を作り跳び回る方が機動力がある。

本当は無印で使うつもりは無かったが仕方ない。

出来ればA'sまで取って置きたかった。

しかし、この方相手に生身でやろうとしたのが間違いだった。

下手に自力の実力を見せようとしたのが間違いだ。

やはりここはいつもの俺らしく、手段を選ばず戦おう。

「プレシア、ココからが本番だ！」

プレシアは俺の宣言に今まで以上に気を引き締め宙に飛ぶ。
どうやら俺が、空戦より陸戦が得意なのに気が付いたようだ。
だが、俺もこれ以上長引かせる気は無い、一気に決める。

「カートリッジロードッ！ 武威！ うおおおおお！！」

俺は全身に魔力を迸らせて正面から突撃！
此処まできたら小細工無用ッ！

迎撃しようと迎え撃つ傀儡兵、

「切り刻め、乱黄龍ッ！！」

俺は高速移動を行い、魔力を纏った肘のブレードを使って前面の敵を切り刻む。

そして止まることなく更に突進。

「喰い千切れえ！ 白虎咬！」

俺は両手に圧縮した魔力を纏い向かい来る傀儡兵を砕きながら前進。
敵の砲撃は強力なものだけ回避、細かいのは両手で防ぐ、或いは無視して突っ走る。

そして、プレシアの護衛をする傀儡兵のもとにたどり着く。

「いくぞっ！ カートリッジロード、舞朱雀！」

俺は肘から伸ばした刃で擦れ違いざまに中型の敵を切り裂きながら、

更に突き進む。

そして敵の一体を踏み台にして跳躍、直上から大型に刃を振り下ろす。

「はああああッ！！！」

俺の攻撃は大型のバリアを切り裂き、そのまま敵を真っ二つにした。大型を破壊しプレシアをこの目に捕らえたとき、奴の攻撃準備はすでに終わっていた。

「消えなさいっ！」

プレシアの放つフォトンランサー・フアランクスシフト！

「ちいっ！ カートリッジロード、パンツァーシルトオッ！」

俺の目の前に展開されたベルカ式、三角形の魔法陣。

視界全てを埋め尽くす射撃、俺はそれ正面から受け止める。

流石にこいつの装甲をもっても、これだけ喰らえば一溜まりもない。

「うおおおおおッ！！！」

俺はシールドに魔力を注ぎ込む。

そして、視界が爆煙に包まれる。

どうやら防ぎきれたようだが、次がお互い最後の一撃になるだろう。ならば、全力を出すまで、俺は一気に魔力を解放、煙を吹き飛ばす。

「カートリッジロード！ フルドライブ！ コード『麒麟』！」

両腕二発（計四発）のカートリッジロード。

俺の全身が黒い魔力に包まれ、肘の刃が伸び、黒く光り輝く。プレシアも魔力を一点に収束する。

「はあああああっ！」

「これで終わりよっ！」

今までで最大級の雷がプレシアから放たれた。

俺は右肘の刃を突き出して突貫ッ！！

「乾坤一擲！」

俺は雷と正面からぶつかり受けきった。

そして、俺は雷を雷切よろしく切り裂いた！

もっとも、出力が俺の方が僅かに高かったから、強引に相殺した感じだ。

生身でやってたら死んでたな……アーマーがボロボロだ。

「もらったッ！！」

勢いは無くなったが、仕留めるには十分。

残る左の刃を叩き込もうとして、側面から迫る閃光に飲み込まれた……

s i e d フェイト・テストロッサ

私が振動や爆発音に気付き、アルフと一緒に広間に来たとき、母さんが青い巨人と戦っていた。辺りには青い巨人に攻撃を仕掛ける傀儡兵、そして破壊された傀儡兵の残骸が散らばっていた。

私は状況が判らずと惑っていたが、母さんのフランクスシフトが青い巨人に降り注いだ。

巨人は爆煙で見えなくなったが、直ぐに煙を吹き飛ばし現れた。そして魔力を放出して母さんに向かって跳躍、母さんはそれに対して雷を放った。

私も母さんを助けるために、

「バルディツシュ、サンダースマッシュアアアアッ!!」

私の放った砲撃は母さんの雷を受けて尚突き進む巨人に直撃した。砲撃を受けた巨人は吹き飛ばされ落ちていった。

それを見ていた母さんは地面に降りてきた。

そして、膝をつき、咳き込み血を吐いていた。

私は直ぐに母さんのもとに駆け寄った。

「か、母さん! 大丈——」

「くうっ…! 余計なことを…」

母さんは私が伸ばした手を払い退けた……

私は払われた手を引き戻し、俯いてしまう。

「いいではないか、結果的に汝は勝つことが出来たのだからのう」

そこに薄笑みを浮かべた女性、ナユタが近付いてきた。

その姿は堂々としていて、強い存在感と威圧感を感じた。

母さんはその女性を強く睨んでいた。

「過程は如何あれ、汝は賭けに勝った。約束は守ろう」

母さんはその言葉を受けて立ち上がり、杖を一振りして残りの傀儡兵や散らばる残骸を片付け、背を向けて歩き出した。

ナユタはその母さんの後について行った。

私は何がどうなっているのか判らなかったが、

「どうやら勝負は、俺の負けらしいな」

ボロボロの青い巨人が鈍い動きで近付き声を掛けてきた。

私とアルフはとっさに構えたが、

「そう構えるな、俺に戦う力は残っていない」

そう言って、黒い光に包まれるとアイギスが立っていた。

私は少し驚いたが気を取り直して質問した。

「どうして、母さんと戦っていたんですか？」

「プレシアと一つ賭けをしてな、二人はこれから如何する？」

俺はあの二人の後を追うが――」

アイギスは私にそう質問してきた。

私はこれから如何するかを考えて、

「……私も付いて行きます」

と答えた。

「俺は余りお勧めできんが……、後悔するかも知れんぞ」

「…それでも行かないと、いけない様な気がするんです」

「そうか、俺は別に止めはしない」

アイギスはそう言い、二人を追って歩き出した。

私もその後引き続き後を追った。

第08話―R 「掟破りのリベンジッ!」 (前書き)

前回負けってしまったアイギス・ガーディアスだ……

本来俺はサポート用に作られた守護騎士兼融合騎、役割でいえばシヤマル+リイン?みたいな感じかもしれない。

戦闘仕様ではなく、あくまで制御用、だが……

な、納得いかんっ!

自業自得かもしれないが俺はやり直しを要求する!!

このままでは俺がナユタに殺されるかもしれない!

それは言いすぎだが失望やO・S I・O・K Iは有るかもしれない!

こうなっては手段を選ばん!

そういうわけなので、今回リプレーだ。

アル意味最終奥義! セーブポイントからのやり直し!

ハッキリ言って禁忌にしてタブーを犯す!!

男としてのプライドは無いのか! ってか?

今の俺にはそんなもの必要ない!

今必要なのは勝利という結果だあーっ!!

俺にはどんな罵りを受けようがタブーを犯す覚悟がある!

(ホントに罵りを受けると凹むけど)

ここで負ける方が駄目だろう!

ここは手段を選ばず何が何でも勝たせてもらうぞ。

そんな訳で『無名王　りりかる　ナユタ』始めるぞ！

第08話―R 「掟破りのリベンジッ!!」

さて、気を取り直して勝負をしようか！

プレシア、悪く思うな、今回はこの勝負、俺が勝たせてもらう。

戦闘とは先手必勝、一撃必殺が必勝だッ!!

出し惜しみ無し！ 最初から全力全開！

アーマードフォーム、リミットブレイクで一気に決める！

熱いバトル？ 魔法戦闘？ そんなもの知らん！

ジョーカーは最後に切れとか、

切り札は敵より先に切るなとか、

エースを切るなら更なる切り札をとか、

そんなこと仕留めることが出来れば関係無し！ 問題無し！

例え切り札を見せなくても、手札を伏せたまま負けては話にならない！

切り札は使えてこそ意味がある。

切れない札など張り子の虎だ！

俺はやってやるぜ！

「それでは始めるがいい！」

ナユタからの合図に俺は、

「蒼牙！ アーマードフォームッ！」

初手からエースを切り更に、

「うおおおおお！ リミットブレイク！ コード『九尾』！」

続け様にジョーカーを切った！

俺の纏う蒼い鎧に全身に刃が生えた。

元から有る両肘にある二本に加え、額、肩、踵、そして背中に二本、計刃9本！

アーマーのフォルムは鋭角に変化し、かなり感じが変わった。

Sアース、ツヴァイザーの方が近い雰囲気かな？

よくわからない？

まあ、兎に角パワーアップしたんだよっ！

見た目も更に強そうになったんだ。おそらく……多分

別にトゲトゲ、ゴテゴテしている方が強そうに見えるかと思ってないぞ！

リミットブレイク、安全装置の解除は伊達ではない！

『麒麟』より更に出力倍増！

基本攻撃力・防御力・加速力も数段アップ！

魔力消費・機体負担も激増！！

：兎に角いろいろ数値が跳ね上がったのだ！

これが俺の最終近接格闘形態だッ！

俺はカートリッジ連続4発ロード（両腕計8発）

「これで終わりだプレシアアアッ！ カートリッジロードオオッ、奥義！」

九音、一閃ッ！！」

九音一閃

超速での擦れ違い様に一瞬で9つの連撃を同時に叩き込む、閃光の一閃！

技を繰り出した時には相手の後方に立ち全てが終わっている奥義！！

……………なんだけど

アイギスにはそんなこと出来ません！

高速の九連撃ならともかく、

超高速移動中、一瞬で九撃とかそんな某侍や某英雄みたいなこと無理です。

アイギスが放ったのは一撃だけで、残り8発は魔法を使ったイカサマだ！

九撃にする意味は全くない！

寧ろ拳に魔力を集束した一発の方が破壊力はでかい。

アイギスの変な拘りが窺える魔法闘技。

名の由来は9撃、9つの音、久遠から

決まった！

俺はプレシアのバリアをブチ抜き一撃を決めた。

完璧に入った。

背後からプレシアの倒れる音がする。

今の一撃、やっというてなんだが……………明らかにオーバーキルだ。

元々病気で弱っていたのにアノ一撃……

し、死んだかもしれない……

俺はゴチナイ動作で、恐る恐る振り返った。

そこには、倒れ口から血を吐いているプレシアさん……

ピクリとも動いていない、背を流れる汗が冷たい。

俺はアーマーを解除し急いで駆け寄り、仰向けに寝かし回復魔法を掛けつつ脈を計る。

脈が弱っている。長くは持ちそうにない。

そう考えてる時、プレシアが咳き込みながら目を覚ました。

「…プレシア、俺のことが判るか」

「…ええ、…結局、私は道を間違えたのかしら…」

「いや、事の可否など見方は千差万別、間違いとも言いきれまい」

「そう……」

「ああ、何を為すかは己の意思で決めること、全ては魂の命ずるままに」

「ふ…っ…、そう、かもね」

いきなり、老け込んだように潮らしくなってしまった。

凄いい晴々した表情、昔に戻ったような感じだ。おそろく。

「あの人が死んだ時に、分かっている…たはず…な…のに」

あの人とはプレシアの夫だろう。
俺も詳しく知らんが、アリシアが生まれる前に事故で死んだらしい。
プレシア曰く「バカな人」らしい。
きつと色々思う事があつたんだろうが、走馬灯を見ているようだし、
いよいよまずい。

「プレシア、言い残すことは有るか」

「…アリ…シ…ア…を……—」

「……心配せず、ゆっくり休め」

俺にはそんな言葉しか掛けてやる事は出来ず、プレシアは瞳を閉じ
眠りに着いた。

俺は無宗教、強いて言うならフロンティア教だが十字を切り黙禱を
捧げた。

出会いがあれば別れもある。悲しいとは思わない。自分で殺^ヤってし
まったことだしな。

どの道全てを喪うのならば、今此处で死ぬのもいいのかもしれない。

「全て終わったか、少々惜しい者を亡くしたかも知れんな」

「……………」

ナユタがプレシアの側まで近付いてきた。

「まあ、せめてもの慈悲、汝が目指したアルハザードの地で眠るが
いい」

ナユタが右手を掲げ暗黒の輝きを放つ魔法陣を展開し始めた。

「いやいや、ここは故郷に埋葬するしてあげる方がいいだろう」

俺は慌てて止めに入った。

そんなことをしたら色々ヤバイだろう。

「むっ、そうか」

「そうそう、埋葬は後でやるとして、差し当たりこの後アリシアとフェイトをどうする？」

俺は何とか止めることに成功。更に話を逸らすために今後を相談。なんかアリシアも母親と一緒に眠らせてあげる方がいいような気がしてきたし、このままうかうかしているとフェイトが来てしまいそうだ。

「母さんッ!!!」

噂をすれば何とやら、フェイトとアルフが着てしまった。

フェイトはプレシアのところに一直線に駆けてきた。

「母さんッ！ かあああああんっ！」

フェイトはプレシアを抱き起こし呼びかけ叫び声を上げる。

瞳を閉じたまま動くことのないプレシアに、涙を流し嗚咽を漏らしながら泣き崩れていく。

気まずい、助ける方法はないこともないと思うが、自分で殺^ヤってしまった手前どうしたものか？

それにここでそれをしてしまうと、さっきまでの流れどうなのよッ！

「プレシアを生き返らせたいか？」

俺が考え事をしているとナユタがフェイトに話しかけた。

（い、いったい何をお考えなのですか！？）

俺はナユタの質問に驚愕！

確かにこの方を生き返らせることが出来る人がいるとすれば、世界
広しと言えどあなた様ぐらいですが！？

フェイトは今初めて俺達がいるのに気が付いたかのように振り返っ
た。

「！？」

「しかし、汝はそやつにとって人形でしかないかも知れぬがな、真
実を知りたいなら付いてくるがいい」

驚愕するフェイトにかまわず言葉を続けたナユタは、言い終わると
振り返る事なく広間の奥に歩を進め始めた。

その背は覚悟があるなら付いて来いと語っているようだった。

俺も背後を気にしつつナユタの後を追いかけた。

正に怒濤の展開だ。うかうかしていると本^{マジ}当置いていかれそうだ。

フェイトも暫しオロオロしていたが、やがて覚悟を決めたのか慌て
て追いかけてきた様だ。ついでにアルフも…

なんか、フェイトも流されているだけな気がするな…

だってほとんど考えてる時間なかったもん、ほとんど直感で行動し

てるな！（断言）

まあ、下手に考え込むよりはその方が良いと個人的には思う。
人間最後に頼るものは己の直感だなッ！
結果がどうなるか、良くなるかも悪くなるかも全く分からないが、

俺は付いてくるフェイトに最終確認。

「付いて来て良いのか？ 後悔するかも知れんぞ、知らぬ方がいい
事もある」

「…それでも行かないといけない様な気がするんです」

「そうか、俺は別に止めはしない」

俺の問いにフェイトはそう答えた。
やはり直感で行動しているなッ！

「それより母さんは…」

「俺が殺^ヤった」

俺は簡潔に応えた。

歩みを止めたフェイトからは怒り、驚愕、困惑、悲しみなど色々な
感情が伺える。

しかしそれは短い間だけ、再び歩き出した。
感情の揺れは収まっていらないが、正直意外だ。

ある程度予測出来たかもしれないが、てっきり切りかかってくると
思った。

これは見た目より相当混乱しているのかも？

俺たちの間に沈黙が流れたが、長く続かなかった。
直ぐにアリシアの収まったカプセルが見えてきた。
俺たちはその手前で立ち止まった。

「こやつが汝のオリジナルよ」

「!?!」

振り向き様にナユタはそう言い放った。

ナユタいきなりの言葉にフェイトの瞳が大きく見開かれる。
溜めも何もなくド直球ストレートなお言葉、俺はもう成り行きに任せる。

「プレシアは実の娘を昔に亡くしていてな、この子の代わりに作られたのが汝だ」

「あつ…、あ…」

フェイトが言葉に成らない様な声を口から漏らす。
しかし、それに構うことなくナユタは話を続ける。

「我らはプレシアと一つ賭けをしてな、プレシアが勝てば娘を生き返らせる。

我らが勝てば汝を貰う。結果は汝も知ってのとうりだ」

ナユタはフェイトを指差しそう告げる。

フェイトは失意呆然としたまま動かない。

「おつまええええっ!」

今まで完全に空気になってたアルフがついに切れた。

俺も叫び声を上げるまで完全に存在を忘れていた。

雄叫びを上げながらナユタに向かっていくが、そうはいかんっ！

俺は直ぐにナユタとアルフの間に割り込むように駆けた。

がっ！ ナユタの前に魔方阵が現れ、閃光を発しアルフともども吹き飛ばされた。

「ぐっうゝわああー」

やはり俺はこういう役回しかっ！

俺は情けない悲鳴を上げながら倒れ伏した。

「しかし、我は汝の意思も尊重してやろう。汝が否と言うなら強制はすまい」

そして、俺の事などスルーしてフェイトに話を続けるナユタさん。

（いいもんいいもん、どうせ詰んないギャグ担当ですよ）

少し拗ね始めてる俺を尚無視して話を進めるナユタ、

「汝が我に忠誠を誓うなら、汝の願いを一つ叶えてやろう」

「！…ね、がいを？」

「我が力を持てれば死者蘇生すら造作もない」

な、なんですと！？

俺とフェイトは今迄で一番の驚愕顔、アルフは気絶イメージはくるくる渦巻き目玉、ナユタは意地の悪そうな不適な笑み、いったいこの先どうなるか!?

全てはその時吹き抜ける風のみが知る! (つまり気分が変わる)

次回に続く、のか?

第08話―R 「捻破りのリベンジッ!」 (後書き)

そんな訳で今回リプレー終了。

アイギスの勝敗で話が微妙に変わってくるのか？

08はテストタロツサ家3人で暮らせそうな感じかな？

Rはフェイトさんゲットのルートかな？ 恋愛フラグは不明。

個人的にはどっちも面白そうだと書いたつもり？ 詰んなかったらすいません。

そんな訳で意見をくれると有りがたい、結果でどっちの続きを書くか決めたいと思う。

どっちが良いかは、

1 || 08、

2 || 08―R

で、書いてくれると嬉しいです。

それではご意見・御感想そして、次回もよろしくお願いします。

第09話 「死せる少女、目覚めの時」 (前書き)

よおー、アイギスだ。

どうやら俺の活躍にはあまり期待されてないようだなー……応援してくれた人、すまない。

まあ、最初から分かってたけどな。

俺としては最終奥義を繰り出してまで得たラストチャンスだったのに、やはりご都合主義でも最後の結末が悪かったか？

俺も物語りはハッピーエンドの方が好きだからな、ヒロインが最後に死ぬのはアウト、だが主人公が死ぬのはOKだ！

やはり女性が死んでしまうのは駄目だろう。

話が随分逸れてしまったな、

俺が言うのは何だけど、テストロッサ一家は幸せになってくれたらいいと思う。そして、出来ればもう本編に関わってこないで欲しい。俺の希望としては故郷で静かに暮らしてくれるのがベスト、間違っても管理局なんかに行かせる訳にはいかんっ！

その辺りは心配しなくてもプレシアさんが生きていれば最悪でもそんな事にはならんと思うがな、

当初の予定どおりE・C・に来てくれればパーフェクト！

フロンティアに移住すればいい、手続きは俺がやろう。

もう物語をかなりブレイクしているからな、今更修正は不可能だろう。

なのはとフェイトの決闘イベントや友達イベントが見れなかったの

がとても、とっつっても残念だ!!

フラグがほとんど起ってないからな、壊したのは俺だけ。

次の機会が有るなら何としても生で見たい!

テレビで見るのとコンサートや映画館で見るのとは、やはり違うんだなこれが。

無印編はもうしばらく続くけど、この回を過ぎれば後は事後処理になってくるような気がする。

俺とプレシアの決戦はメインイベントだったろう……多分

えー、それでは今回のゲストをお呼びしたいと思います。
どうぞ、よろしくお願いします。

え、えっと、フェイト・テストロッサです。
よろしくお願いします。

今回は、お招きいただきありがとうございます。

……こんな感じでいいのかな?

まあ、良いんでないかい?

それで、今迄で何か感想や質問はあるかい?

私、これからが大変な事になるんだとか原作と随分違ってきたな
って、

何か人事みたいですな。

うっ、ごめんなさい。

(私もいきなりここに引っ張ってこられたんだけど……)

あ、別に謝らなくていいよ。ここは本編外だし、ある程度メタな発言も許されるとこだ。

それより実はフェイトさんにどうしても会いたいという方が今回ここに来ています。

私に、ですか？

（ひょっとしてなのはかな！？ 本編で殆ど逢えて無いし、なのは余り出番無かったし…）

——ブルッ！——

ええ、そうなんですよ。

（一瞬身の危険を感じる気配を感じたような？ ここはスルーするが吉！ 気にしたら負けだ、ってかヤバイ。

しかし、これはなのはを期待しているのかな？ なんせフェイトはなのはの嫁 【※俺認識】 だからな！ しかし残念だったな今回は違う！）

それでは早速お呼びしたいと思います。
どうぞっ！

フェットゥーッ！！☆ ぴょん♪ ※効果音

キャッ！？ バッターンッ

（見事なジャンピングダイブだッ！）

うっっ、会いたかったよ♪ スリスリスリ ※頬擦りの音です！

（現在頬擦りしながら激しく抱きしめ押し倒しています…）

えー、そんな訳で特別ゲストのアリシア・テストロッサさんです。
一応？ 約束？ をしていたし、どうしても本編前に会いたかった
とか？

そうそう、今まで待たされてたから今直ぐ会いたくなっただけ♪
だから、私がお願いして拉致っ、もとい連れて来てもらったんだか
らーって、フェイト？

きゅー☆ コテ…

ふえ、ふえいと！ ぶんぶんぶん ※揺さぶってる効果音

（全く反応が無い、只の屍n…

縁起でもない事思わないで！！

…それではゲストが気絶してしまったのでそろそろ本編を始めたい
と思います。

フェイトさんの代わりにアリシアさんよろしくお願いします。

うん、しょうがないね。妹の不始末は姉の私が責任持とう。

それじゃ『無名王』りりかる ナユタ』はっじめまーす♪

第09話 「死せる少女、目覚めの時」

「うっ、くう」

どうやら俺は気絶していたようだ。俺がプレシアを倒したような気がしたんだが、現状を見ると、どうやら夢だったようだ。

夢落ち、か……

身を起こした俺が見たのはプレシアとフェイトに歩みよるナユタ……
ついでにアルフは少し離れてる。

俺は立ち上がりながら最後の光景を思い出す。

確かフルドライブでプレシアに突貫した俺はプレシアの放った雷を
切り裂いた所を、横合いから飛んできた閃光に飲み込まれて……

そうか、フェイトの攻撃だったのか、

俺はそんな事を考えながらボロボロの体を引きずり歩き出した。

流石にいろいろ無理したな、これは自己修復に少々時間が掛かるぞ。
こんな事なら、装甲に耐電仕様の特別コーティングを施して置くべきだった。

そして、プレシアとナユタは広間の奥に移動を始めた。

多分アリシアの元に行くんだろう。

俺は残されたフェイトに声をかける。

「どうやら勝負は、俺の負けらしいな」

声を掛けられたフェイトは俺に気が付き警戒する。
アルフもフェイトの側に付き俺を警戒し身構える。

「そう構えるな、俺に戦う力は残っていない」

そう言って、俺はアーマーを展開したままなのに気付き解除する。
やろうと思えばまだ戦う術はあるが、ここでそんなことは言えない
だろう。

俺は両手を上げて降参のポーズ、フェイトとアルフは一瞬ポケットと
した顔になった。

「どうして母さんと戦っていたんですか」

気を取り直したフェイトからの質問、

その様子には詰問の意思が見て取れる。

「プレシアと一つ賭けをしていてな、二人はこれから如何する？
俺はあの二人の後を追うが…」

そして軽く答えつつ俺もフェイトに問う。

「…私も付いて行きます」

と答えた。

「俺は余りお勧めできんが…、後悔するかも知れんぞ」

「……それでも行かないといけない様な気がするんです」

俺は確認の問いかけにもフェイトは答えた。

「そうか、俺は別に止めはしない」

確かに行かずに後悔するよりは行って後悔する方が俺もいいと思う。
それ以降俺たちはアリシアの下まで無言で歩んだ。
俺もフェイトもこれから起きる事に不安を抱きながら。

そして、俺たちはアリシアの入ったカプセル？ の下まで来た。

俺は気になるフェイトの様子を横目で伺った。

フェイトはアリシアを見て固まっていた。

「では早々に始めるとしようか」

ナユタが一步前に踏み出し、アリシアに右手を翳しその手を軽く横に払う。アリシアの入っていたカプセルは粉々に砕け散り、アリシアは宙に浮かび上がる。

それに対してプレシアが顔を顰めたのを俺がフォローする。

ナユタはそんな周囲に構う事無くアリシアの下まで歩み寄りその身に手を添える。ナユタから強力な魔力が発せられ足元に黒き虹色に輝く巨大な魔法陣が展開される。そして二人の周囲を囲うように瞳を模した魔法陣が浮かび光を放つ。

ナユタはアリシアより一步下がり指を広げアリシアに手を翳す。
手の平に一切大きな一つ目の魔法陣が浮かび上がる。

その魔法陣は膨大な魔力を集束させて徐々に輝きを増していく。そして、遂にそこから放たれる幾条も折り重なる光の帯が、アリシアを貫き環状型の魔法陣が繭の如くアリシアを覆い尽くす。

更に、周囲に浮かび上がり光を放っていた魔法陣からも、魔力が開放されて、繭を稲妻が貫くが如く魔力が注がれる。

例を挙げるなら八方からデータドレインを喰らった様な感じだ。

ハッキリ言って禍々しい事この上ない、正に悪魔に売っちゃまった様だ。

高速回転していた繭が弾け飛び、周囲に浮かぶ魔法陣や地面に輝く魔法陣も消えていく。

後に残ったのは宙に浮かぶアリシア……

俺はアリシアから確かな心臓の鼓動、生命の息吹を感じとることが出来た。

ナユタはプレシアに視線を向ける。

プレシアはその視線を受けてゆっくり、恐る恐るアリシアの下に歩み寄る。

プレシアは宙に浮くアリシアを抱き留め呆然としていたが、

「ううっ…ん…」

アリシアから微かな呻き声が漏れる。

プレシアは涙を流しアリシアを強く抱きしめた。

どうやら終わった様だな、俺はただ見ているだけだったけど…

フェイトとアルフは完全に置いてけぼり、呆けた顔をしている。

俺は声を掛けるかどうか悩んだが、結局放置した。

ここで俺が話さなくても後々判ることだろう。

それにこの事は俺の口から語るよりプレシアの口から語るべき事だ
と思う。

そしてアリシアが目を覚ます。

「うつく、くるしい…よう…」

「アリシアッ、アリシア!!」

苦痛を訴えるアリシアを更に強く抱きしめようとするプレシア、

「苦しいってばっ!!!!」

アリシアは怒鳴りプレシアを押し退ける。

「ああ…、ごめんなさい、アリシア」

押し退けられたプレシアは哀しそうな顔をしたが、再びアリシアに
手を伸ばす。

「ママ？」

「ええ、そうよ、アリシア」

「えっとおー……、なんだか、とっても老けたね」

——ピシィッ——

空気が凍った。

いやあ、正確にはプレシアが石化した。

アリシアは辺りをキョロキョロと見回す。
そして、傍に近づいたナユタに目を移す。

「ナユタ！」

「久しいのう」

「わああ！ 病氣治ったの！」

「うむ、はしゃぐのは構わぬが、先ずその格好を如何にかするべきじゃのう」

そう、アリシアに言葉を掛けたナユタは軽くアリシアの頭に手を置いた。

アリシアは光に包まれ、次の瞬間には髪の間端をリボンで結び、淡い色のワンピースを着て立っていた。

「ありがとう、ナユタ」

「この程度は容易い事じゃ」

アリシアは自身を見回しに嬉しそうに礼を言いナユタもそれに答える。

アリシアはナユタにとっても懐いている。
アリシアがナユタに会ったのは一度だけ、俺がプレシアをヘッドハ

ンディングに一度自宅に行ったときだけ、勿論このときはプレシアは仕事でいなくて、玄関先で待たせてもらった。

アリシアは留守番で家において、この時ナユタに懐いたようだ。

きつとナユタの持ち得るカリスマの御蔭だろう。

意識が無くてもオーラと呼べるものが体から滲み出ていたからな、因みに意識がある今は俺式比較でそのカリスマ値は約2倍になっている。

「アリシア、久しぶりだな」

「アイギス！ ひさしぶり〜！」

俺も置いていかれない様に声を掛ける。

「実はアリシアに紹介したい子がいてな」

俺は体を一步引いて顔をフェイトに向ける。

アリシアも俺の視線を追ってフェイトに顔を向ける。

フェイトは自分に振られて少し混乱気味。

俺はフェイトを手招きで呼ぶ。

フェイトはオロオロしながらこっちに近づいてくる。

ついでにアルフも、

「二人ともアリシアに自己紹介、アリシアも二人に自己紹介」

何故かこの場を仕切る俺、まあ、俺しかいないから仕方ないか、ナユタには頼めないだろう、プレシアもまだ固まっているし、

「えっと、フェイト・テストロッサです」

「あたしはアルフだ」

フェイトは困惑気味、アルフは怪訝、疑惑等を感じているようだ。

「私はアリシア・テストロッサ、よろしく！」

アリシアは元気よく挨拶、

これがこの二人の初めての出会いになるのだが……

「ねえねえ、フェイトってもしかして私の姉妹？ 妹？ 妹だよね！
そうだよね！！」

「え、えっと…」

フェイトにアリシアは勢いよく詰め寄っている。

なんだか急展開してるのか？

「私のことはお姉ちゃん、姉さん、何なら姉さまと呼んでくれてもいいよ♪」

アリシアはめっちゃ喜んでフェイトに抱きついている。

見た目的にはアリシアが妹なんだが、アリシア的にはフェイトはすでに妹らしい。

まあ、まちがいではないけどな、
フェイトはかなり混乱している。

「ちょっと！ フェイトから離れなよ」

「まあまあ」

アルフはアリシアを引き剥がそうとする。
俺はアルフを宥めて抑える。

「くっ、くっ」

ナユタはこちらを笑いながら眺めている。
プレシアは：まあ、放置して置こう。

っと思ったけど、そろそろ起きてもらわないと話を進められない。
仕方がない。余り気は進まないが……いや、ここは傍観しようかな？
その方が面白そう。と言うか場が混沌と成りそう。
と言うより既に混沌な様相になっている。

よし！ 俺は何処まで行く「続く」か見届けてやろう。
ナユタも動く気配は無さそうだ。

そんな訳で俺は傍観することを決め込んだ！
俺は自分から動くつもりは無い！

果たしてこの混沌とした場はどう収まるのかっ！
話は全く進んでない様な気がするが、

次回を刮目して待て！！ （言ってみただけ）

なんて俺はふざけていたんだが、
この時ナユタが強大な魔法を遣ったせいで、いろいろ動き出して

たらしい。

俺がそのことを知るのは、まだ暫く先の話だが、

第09話 「死せる少女、目覚めの時」 (後書き)

どうも作者です。さてアリシアが生き返ってきました。

これからナユタさんとアイギスはどう動くのか、

今はまだ分かりませんが、次回に続きます。

それではご意見・御感想そして、次回もよろしくお願いします。

第10話 「引越しの報告です」 (前書き)

人生とはまま成らないものだ。

故に思い道理に歩むには押し通る為の強い力が必要だが、諦めて別の道を進むのも選択肢の一つだと思う。 byアイギス

そんな訳で、最近役割を放棄したくなってきたアイギスだ。

最近、ふと思ってしまったんだが、本編で俺、必要なくなねえ。

何かナユタが居ればそれでいいような気がしてきた。

兎に角、本編での立ち位置に真剣に悩んでいる俺。

俺は主人公最強派、ゲームでもレベルは取り敢えずMAXまで上げる。

主人公を自称するからにはヒロイン「主観的」を守らなくてはならんだろう。

最低でも肩ぐらい並べたい「希望」
いずれ何とかせねば成るまい。

それでは愚痴ってても始まらないので毎回恒例化したゲストを呼ぼう。

っと思ったが、どうも手近なところは空いてないのか？

其れでは我等が出てやろう。

!!?!

えーと、ナユタさんとガラム、何故ココに？

困っていた様だからな、態々来てやった。

御供を仰せつかり供に来た。

それはそれは、御足労ありがとうございます。御座います。

それにしても、ガルムは久しぶりだな、元気してた？

我は息災であった。

ああそう。

相変わらず無口だね。ザフィーラとキャラ被るぞ。

その程度は些事、気にする事ではなからう。

聞かれた事には答えている。

確かにそうだ、実際の設定も全然違うしな。

ガルムの人型設定は頭髮黒で三つ編み、小眼鏡、スリム、執事系だ。ザフィーラとはタイプがまるで違うな。

我の従者を勤めるからには、それ相応の者でないと務まらぬ。

お褒めに預かり恐悦至極。

しかし、三人ならまだいいが、これ以上増えてくると、誰が喋っているか判らなくなるな。

そこは貴様の腕次第じゃろう。

まあ、対策は追々考えるとして、そろそろ本編を始めるか、

（今回はメンバー的にこれ以上話を振っても、面白くならんだろう）
ガラム、よろしく頼む。

了解した。

之より『無名王　りりかる　ナユタ』始まります。

第10話 「引越しの報告です」

さて、流石にそろそろ話を進めないと駄目だろう。

いろいろ滞って来たし、不味くなって来た。

何より面白くない、俺も流石に飽きた。

そんな訳で、

「プレシア、いい加減正気に戻れ」

俺は腕を振り上げ頭頂にチョップを落とした。

——ガスッ！

「っ！！」

「そろそろ話を進めるから説明よろしく」

再起動したプレシアは咳払いをひとつ。

「ええ、わかったわ」っと言い、アリシアとフェイトに歩み寄った。
今までの醜態が無かったかのような堂々とした歩みだった。

まあ、俺的には今更取り繕っても遅いが…

それからプレシアの説明がアリシアやフェイト、アルフにされた。
説明途中に一悶着あったが、俺とナユタは微笑ましく見守らせてもらった。

具体的にはアリシアとアルフが騒いだり、フェイトがオロオロしたり、アリシアの言葉にプレシアが凹んだりと……、言って置くが俺は説明を聞いていなかった訳じゃない。

聞き流していただだけ、事情は大体知ってたし。

ひとまず落ち着いた所で、俺は声を掛けた。

「それで、これからどうするんだ？」

「そうね、私の願いは叶ったわ。後はゆっくり静かに暮らしたいわね」

俺は残りのみんなに視線を向けた。

「私は母さんが娘と認めてくれるなら、私は母さんたちと一緒にいたい」

「私もママとフェイトと一緒にいたいっ！」

「あたしはもちろんフェイトと一緒に居るよ。何たってフェイトはあたしのご主人様だからね」

みんな元気いいな、さっきの説明の内容が嘘のようだ。

きっと、アリシアのせいで本来ならシリアスな展開が碎けてしまったんだろう。

まあ、俺的には全然問題ないんだが、

「そうか、ならジュエルシードの件は俺に任せろ、後始末はしておこう。

プレシアはゆっくり療養して病を治せ、そうすれば後二・三十年は生きられるだろう」

「二・三十年か、そんなに持つかしらね」

「「……………」」

うっ、しまった一気に暗くなったような気がする。

フェイトたちが心配げな視線をプレシアに向けている。

「治療に関してはいい医者も紹介してやろう。

他の方法も無い訳ではないと思うが……」

俺はナユタに視線を向ける。

「我が力を持ってすれば出来ない事はないが、

我に『モノ』を頼むということは、それ相応の代償を必要とするぞ」

流石ナユタさんだ！　こういう所は確りしている。

もっとも、これでなかなか気に入っているようだから、無理難題は言わないだろう。

……………たぶん

「お願いします。母さんを助けてください、私に出来ることなら何でもします。

だから母さんを助けてください！」

「ナユタ、わたしからもお願い。ママを助けてあげて」

「あたしからも頼むよ。あたしも出来ることなら手を貸すからさ」

「あなたたち……」

プレシアは涙をにじませ感動している。

「では我からの要求を言おう。私の要求は――」

まずは跪き、靴を舐めろ。そして、我に永劫の忠誠を誓え」

「「「……………」」」」

長い沈黙が通り過ぎたが、

「ふっ、ジョークだ」つと続けて言った。なかなかお茶目だ。

俺には、まったく冗談に聞こえなかったが、

しかし、忠誠を誓えというのは本気だったらしく。

プレシアは粉骨碎身して我が社で働くことが決まった。

ナユタさんによれば、我が会長を勤めるからには、私の好きにさせて貰うぞ。

などと言っていました。無茶なことは控えて欲しいと心から思う。

こうして、PT事件と呼ばれる筈の事件は人知れず幕を下ろした。

さてこれから俺は残りのジュエルシードを片付ける筈だったんだが、

「フェイト・テストロッサです。よろしくお願いします」

「フェイトのおねーちゃんのアリシアです！」

「二人の母親のプレシアよ。よろしく」

「あたしはアルフ、フェイトの使い魔だ」

「プレシアの使い魔でリニスと言います」

「私は八神はやて言います。こちらこそよろしくー。
気軽にはやてって呼んでください」

何故か今現在、はやての家で自己紹介している。

話が跳んでるって？ それは否定しない。

事実俺も跳んでるような気がする。

あれから何が有ったかというと…

アリシアの時のようにナユタさんのご都合主義的超魔法で、プレシアさんが若返り病気が治った。

今現在のプレシアさんの外見年齢は二十代半ばぐらい、軽く二十は若返った。

プレシアが若返って病気が治ったことで、今まで魔力供給が止まっていた眠りについて居たりリニスが目を覚ました。

ここまでいい！

俺にもまだ予想できた。過程は兎も角、予定範囲内だ。

しかし、一段楽したときにフェイトがジュエルシード探しを手伝うと申し出た。

もちろん俺は断った。

フェイトに渡したジュエルシードを返してくれれば、それでいいと言ったんだが、

フェイトの上目遣い十つぶらな瞳に俺の心は瞬殺！

ついついフェイトの同行を認めてしまいました。

ここからズルズルと……

フェイトが来るということは当然アルフも来る。

ここでアリシアが「わたしもフェイトに付いて行くー！」っという、そうするとプレシアも手伝うと言いつ出した。

曰く元々は私がフェイトに命じたことだとか言って、そしてリニスも付いてくることになった。

リニス曰く「私はフェイトとアリシアの教育係ですから」だとか、おいおい、アンタ仕事はどうするんだ。などと思ったが、ナユタさんが許可を出してしまった。

こんな感じで第97管理外世界に着たら、何だかんだではやてに挨拶に行くことになってしまった。

つとこう行つた経緯があつたのさ！

因みに時の庭園は、フロンティアに移動してもらつた。

特に問題はないと思うが、万が一管理局に発見されると面倒だからな、

「さて、挨拶が終わつたところでこれから話をしよう。

ぶっちゃけた話、俺たちは管理局に係わるというろと面倒くさいことになる」

俺は全員にお茶を入れて、これからのことについて考えを巡らす。

「何で面倒くさい事になるん？」

はやての質問、

「はやてには前にも話したと思うが、ここに居るのは全員訳有りだ。言っとくけどはやても例外じゃないぞ。

はやてはロストロギア夜天の書のマスター、

プレシアは違法研究者、

フェイトは戸籍上存在しないし、アリシアは戸籍上死人。

俺は古代融合騎でナユタに関しては言わずもがな」

「ああ、そういうば私もそやったな、うっかり忘れてたけど。それにしても、みんないろいろやな」

「まあ、それは管理局から見ての話で、幸いここは管理外世界だ。連中なら治外法権を行使しようとするだろうが、俺たちはフロンティア、それもE・C・所属になるから関係ない。ナユタはE・C・会長だから向こうも迂闊なことは出来ないだろう。

フェイトたちについても、戸籍はフロンティアで新しく作るからいい」

最悪戦争にもなりえるかもしれないからな、流石に向こうも引き下がるだろう。

言って置くが、我が国の守護を勤めるフロンティア兵団は、管理局にも引けは取らない。

数ではこちらが下だろうが、総合戦力は上だろう。こっちは質量兵器もあるから火力が違う。

「えっと、それではこれからどうするんですか？」

「うむ。そこで、表はなのはに任せようと思う」

「なのは？」

「フェイトも一度戦った。この子ね」

そうやって俺はデバイスを使い空中にモニターを出す。
そこになのはとユーノのプロフィールを軽く出す。

「なのはちゃんに全部まかすんか？ 危ないんと違うん？」

「なのはの実力なら恐らく大丈夫、それに全部ではない。 飽くまで表はということだ。」

俺たちは裏、つまり見つからないように回収する訳だ。
それに、もしもの時は、俺が拳王で出る。

まあ、余程のことがない限りそんなことはないだろうが」

「けんおう？」

「俺が使っていた蒼い巨人の鎧だ」

俺が使っているアーマードデバイス。

モデル…アークゲイン、機体銘『拳王』

市販されているアーマードとは、かなり仕様が異なるが、これは俺用に作ったからだ。

本当はアーマードに分類しているが、実際は魔導機、自律行動もできる。

市販品のアーマードデバイスは殆んどが鎧型のデバイスだが、他にも様々なタイプが存在する。

仮面ライダー的なや宇宙刑事、パワードスーツ的なものが多い。魔力資質がなくても扱えるものもあり、魔導鎧骨格とも呼ばれている。

因みに、市販されているのはフロンティアだけである。

管理局は質量兵器に近い仕様になっているこのデバイスがお嫌いらしい。

「拳王……。　なら、あなたがフロンティア王？」

俺に質問をしてきたプレシアさん。

「はずれだ。フロンティア王はこちらのナユタさんだ。

フロンティア王に付いては、正体不明で諸説様々な伝承や逸話が残っているようだが、戦鬼と呼ばれた戦姫こそ、本物のフロンティア王だ。

拳王がフロンティア王と間違った伝承が残っていたのは、たぶん、戦に置いて総大将を勤め上げ、士気向上のために前線で戦っていたから、どこかでズレて伝わったんだろう」

うん、歴史は不思議でいっぱいだな。

いったい何処でそんな風に伝わったのか？

などと考えていたら、脱線した話をフェイトが元に戻した。

「それで、発動したジュエルシードはこの子に任せるんですね。

私たちが回収したジュエルシードはどうするんですか」

「それはもちろん、我が社で有効利用させてもらう」

これが有れば、もっとすごい俺の発明品が作れるからなッ！
データは粗方収集出来たが、やはりオリジナルも欲しい。

「これに付いては明日、それとなく釘を刺す序でに挨拶＋交渉に行こうと思う。

ナユタさんも目を覚ましたことだし」

「釘を刺すのがメインなんやなー」

「当たり前だろう。さっきも言ったが管理局にチクられると面倒くさい。

管理局がやってくるまでに全てを回収させてもらおう。まあ交渉しだいで予定の変更もあり得るが」

「ハハハ」 「汗」

乾いた笑い声が響いた。

誰のとは遭えて言わないが、

「さてこれからの方針は一応決まった。
これからどうする？」

「それは決まっとる、新しい友達の歓迎会やー！！」

「おおー！！ わたしもそれにサンセーイ！」

「「イエー！！」」

はやてとアリシアが意気投合！ ハイタッチでテンション上げてる。

「それならさっさと準備をしよう。場所はプレシアの家でいいな」

「えっ？　ここでせえへんの？」

「プレシアたちはこの世界に着たばかりだしな、買出しとかもいろいろ有るだろう」

「そうね。この世界にしばらく居るなら、もう少し手を打たないといけないわね。」

リニスにも手伝ってもらおうわよ」

「それなら俺が手伝うからリニスはフェイトやはやてと一緒に買出し行けよ。」

それからプレシア、この世界に居座るならこっちの町に越してこいよ、その方がはやても喜ぶ」

何かプレシアたちはこの世界に居座るみたいな感じだからな、隣の遠見市より、こっちに來たほうが何かと便利だろう。俺もこの世界じゃ根無し草だし、家のこと真剣に考えるか？

異世界に拠点の社宅や研究所・遺跡・借家はあるが歸る家ってなかったと思う。

いや、はこぶね・ノアこそ、俺やナユタの歸るべき場所だろう。あそこには仲間たちがいるからな。そこにはいずれ、はやてやフェイトも増えるだろう。

そんなことを俺は考えながら慌しく時は過ぎた。

「それでは新たな出会いと引越しにっ！」

「「カンパーイッ!!」」

「か、かんぱーい」 「声小さめ」

はやての音頭で歓迎会＋引っ越し祝いが始まりました。

引越しに付いては、また直ぐに引っ越すかもしれないが……

フェイト、アリシア、アルフはノリノリで最初からハイテンション。
フェイトはちよつと顔を赤らめて恥ずかしそう。

「フェイトちゃんこういうのは乗りと勢いやでっ!
ほんならもう一度! ハイッ!」

「「「カンパーイ」」」

「おお、ええ感じやで! 因みに料理に関してはわたしと兄ちゃん、
リニスさんが腕を振るわせて貰いました。どんどん食べてやー」

「はーいっ! たくさんいただきマースッ!!」

「ううっ」 「顔真っ赤」

「この肉、なかなか美味しいね」

「アリシア、アルフ、あまり急いで食べると喉に詰まりますよ」

「偶にはいいわね。こういうのも」

「祝い事は騒がしい位が丁度良いものじゃ」

「酒も無いのにこのテンションには一寸付いてけんな、俺も年かな」

こんな感じでかなり盛り上がっている。

「宴会って言ったら、やっぱりカラオケやな！ そんな訳で一番フェイトちゃん行ってみよか？！」

「イエーイ、待ってました！」

「ええーっ！！ わたし歌なんか歌えないよ」

「フェイトちゃん、さっきも言ったがこういうのは勢いやッ！ 成せば成るッ！！
兄ちゃんよろしくうー！！！」

「おお」

はやてはフェイトにマイクを押し付け俺に合図を送る。

俺は電気を消してフェイトをライトアップ、モニターを映し音楽を流す。

曲は無論、無印オープニング「innocent starter」を掛けてやった。

個人的にはA'sのオープニングの方が好きだが、まあ、この次で良いだろう。

フェイトも諦めたのか自棄を起こしたのか吹っ切ったのか途中からかなりノリノリで歌っていた。

やはりプレシアに褒められたのが原因だと思う。

プレシアも最初の内はフェイトやアリシアにまだ遠慮や戸惑いもあったようだが、そんなものはすぐになくなったようだ。うむ、いいことだ。

歌は、最後の方はかなり旨くなっていたと記載させてもらう。
因みにアリシアも同じ位旨かった。
こうして宴会は夜遅くまで盛り上がった。

また次回に続く！

第10話 「引越しの報告です」 (後書き)

無印編はすでに山場が済んでしまいました。

この後どうなっていくんでしょうか？

果たして管理局の出番はあるのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5246n/>

無名王 りりかるナユタ ～チートなのはヒロインです～

2011年10月6日21時28分発行